



St. Luke's College of Nursing
Booklet 2

高橋シュン その人生と看護

聖路加国際大学
大学史編纂・資料室 編

高橋
シュン

その
人生と
看護

聖路加
ブックレット
2

St. Luke's College of Nursing



*St. Luke's
College of Nursing
Booklet 2*

高橋シュン その人生と看護

聖路加国際大学
大学史編纂・資料室 編





ナイチンゲール記章受章（1997年7月）

目次

はじめに

聖路加国際大学学長 井部 俊子
聖路加同窓会会長 松谷 美和子

第I章 シユンの生涯

1 シユンの生涯

立山 恭子

2

第II章 看護教育とシユン

- 1 若い時代の看護の喜び体験ーシユン先生から学んだ多くのこと
- 2 聖路加短期大学時代ーパッションの教育者、ロジカルな実践者
- 3 看護教育発展への取り組みーオープンマインドのリーダー
- 4 生涯を看護教育に捧げてー松江での日々

川嶋 みどり
岩井 郁子
近藤 潤子
杉谷 藤子

26
37
51
60

第III章 資料篇

- 1 文献一覧
- 2 紹介記事転載
- 3 講演録・執筆原稿抜粋
- 4 葬送式次第
- 5 経歴・業績
- 6 思い出の写真

70
76
78
101
104
106

おわりに

家族を代表して 高橋 農夫也

あとがき

大学史編纂・資料室 客員教授 渡部 尚子

はじめに

聖路加国際大学学長 井部 俊子
聖路加同窓会会長 松谷 美和子

高橋シユン先生は、二〇一三年（平成二五）七月一七日に榛名「新生の園」で永眠されました。九九歳でした。「私は夏に逝くのだよ」とおっしゃったとおりでした。

高橋先生は、一九八二年（昭和五七）に聖路加看護大学を退職されているので、それ以降に、聖路加看護大学に入学された方はお目にかかる機会が少なかったでしょう。

高橋先生は、日本の看護界に大きな功績を残された方です。その足跡は高橋先生の経歴が示しています。一九三五年（昭和一〇）に、聖路加女子専門学校を卒業後、聖路加国際病院で看護婦となり、一九四三年（昭和一八）にはマニラ日本病院に勤務、やがて終戦を迎えられ、一九四六年（昭和二一）一月によやく帰国されました。帰国後は聖路加国際病院に再び勤務、一九四八年（昭和二三）六月には米国ウエイン大学に留学され、翌年九月に帰国されました。その後、東京看護教育模範学院の教員となられ、その時期の活躍は今も語り継がれています。模範学院解消後は、築地の地に戻られ、聖路加短期大学で教員を続けました。そして、厚生省の審議会委員や日本看護協会の教育委員を歴任され、文部省の大学設置審議会委員や看護学視学委員も務められました。一方、一九六四年（昭和三九）に聖路加看護大学教授に就任されて以来、大学院での教育も含めて一八年間、聖路加看護大学で教育者として貢献されました。それ以前の聖路加女子専門学校、聖路加短期大学の教授経験を含めると三三年になります。そして一九九七年（平成九）にナイチンゲール記念記章を受章されました。日本看護協会総会には、毎年名誉会員席に高橋先生のお姿がありました。

高橋先生が逝去されておよそ三ヶ月後の一〇月六日に、聖ルカ礼拝堂で「ドルカス高橋シユン先生を偲ぶ会」をいたしました。聖路加看護大学と同窓会が主催しました。多くの同窓生が参集し、高橋先生を偲びました。ケアホーム新生の園園長、柳沢啓一様から高橋シユン先生の新生の園での暮らしとその最期の様子を伺いました。川嶋みどり様からは、東京看護教育模範学院卒業生が体験した、高橋先生の業績を伺いました。聖路加看護大学の同僚からみた高橋先生の活躍を岩井郁子様から伺いました。その後のお茶の会では、聖ルカ礼拝堂信徒の後輩として松本満郎様、高橋先生から薫陶を受けた代表として蛸名美智子様（一九六九卒）から思い出を語っていただきました。

聖路加ブックレットの今号は、看護と聖路加に一生を捧げられた高橋シユン先生の足跡をまとめ、高橋シユン先生の功績を称えるとともに、先生の遺した言葉や行動を具体的に紹介することによって生き生きとした人物像を描き、若い世代に高橋シユン先生をまるごと伝えることを目的として作られました。

ぜひご覧ください。

二〇一四年七月

第I章 シユンの生涯



香蘭女学院卒業式 2列目右から6番目がシユン（1932年3月）



シュンの生涯

立山 恭子

生い立ち

高橋シュンは一九一四年（大正三）四月二八日に北海道札幌郊外でキリスト教日本聖公会の伝道者高橋夫妻の四人目の子どもとして出生しました（シュンは自称二九日と言っていました。これは女学校入学の折、二九日は天長節で祝いの日だから東京に行っても淋しくないだろうと母に言われたからだそうです）。しかし先に生まれた女の子二人は生後間もなく亡くなったために長女として届けられました。大正初期の日本では一人生まれただけの子で一人は人が一歳を待たずに亡くなっていました。兄が一人いましたが、シュンが四歳の時に川で溺れて八歳の命を失いました。その時の両親の悲しみを生涯ずっと忘れられませんでした。兄を失ったそのときからシュンは高橋家の長女として多くの弟妹の世話をとても良くしました。小学校時代は旭川に近い深川で過ごし、家事手伝いに忙しかつたけれども、晩年には「男の子たちとよくチャンバラして遊んでいたのよ」と生き生きとした表情で嬉しそうに話っていました。シュンが北海道で生活したのは小学校卒業までの一二年間ですが、一生涯、北海道はシュンの心の中に大きな面積を占めていて「私は北海道の大地に眠るからね」が口癖でした。

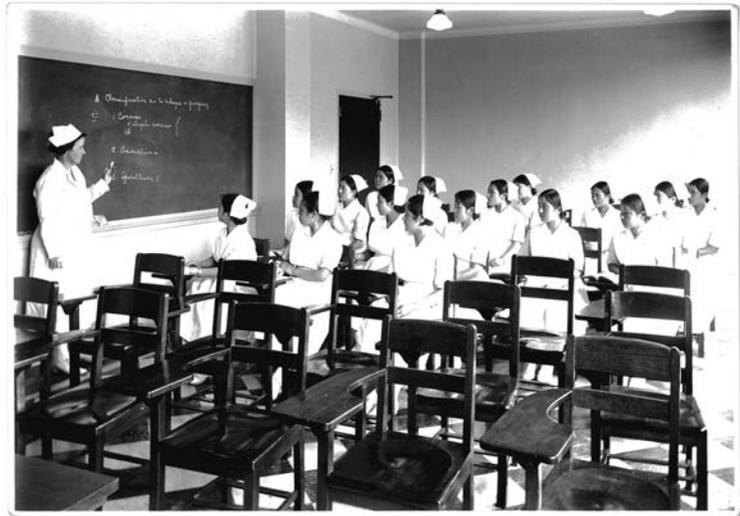
女学校時代

シュンは旭川にいた宣教師の勧めで、東京の香蘭女学校を受験するために上京することになりました。一九二七年（昭和二）のことでした。当時北海道深川から東京までは二泊三日の旅でした。受験に合格し、めでたく女学校入学が許可されました。世の中は世界経済恐慌が始まり、戦争の足音が聞こえ始める時期でした。イギリス人宣教師が舎監を務める寄宿舎に五年間暮らすこととなりました。この五年間にキリスト教の信仰を基に全人的教育を受けることになりました。

シュンは女学校時代を振り返り、「本当に女学校の時に英語をしっかりと勉強し、その他の教科もよく勉強したのよ」と話していました。外出できるのは日曜日の礼拝が終わった後だけだったので、勉強ばかりしていました。ガールスカウトに入隊し、色々な奉仕を行いました。その中で人間は一人一人がかげがえのないものであるということ、そしてこの広い地球上に人生は一回の登場であるということを知りました。最高学年となり副校長のターナー先生が、シュンに「あなたは人を世話することが好きなようだから看護学校に進んではどう？」と言いました。この言葉によってシュンは看護学校に進み勉強することを決心しました。当時、看護学校入学に女学校卒業資格が義務付けられていたのは聖路加女子専門学校だけでした。聖路加女子専門学校は香蘭女学校と教派を同じくする学校でした。宣教師たちは人の役に立つ人材を育てるために女子には教員になること、看護師になることを勧めていました。ミス・ターナーがいたからこそ、シュンは看護師となり、日本の看護教育をリードする人材となれたと言えるでしょう。看護の勉強に進む前の中等教育でシュンは信仰的にも学業的にも強い影響を受けました。



「白いstockingと靴は私たちのクラス（1932年24名入学）から始まりました（シュンのアルバムより）」当時の木造校舎前にて 右から8番目がシュン



Miss. Whiteによる授業 最後列右端がシュン（1933年）

聖路加女子専門学校へ

時代的には五・一五事件（一九三〇年・昭和五）などが起きて日本はだんだんと軍国化されてきた一九三二年（昭和七）、シュンは無事に聖路加女子専門学校に入学できました。住みなれた品川の寄宿舎から銀座近くの築地へ引越しました。当時の聖路加女子専門学校は本科三年、研究科（公衆衛生看護）一年の修業年限でした。国家試験はなく卒業証書が看護師資格を保証していました。看護の教員の殆どはアメリカ人看護師で、既に大学を卒業し学士の資格があり、その中の何名かは修士号の有資格者もいました。入学後半年間はオリエンテーションも兼ねた学科中心の授業でした。その間の成績や生活態度が評価され、看護教育を受けることを続ける方針が決まるとキャッピング（たいしち戴帽式）が実施されました。二年生、三年生になると学科と平行して長時間の実習が行われるようになりました。シュンは後にこの教育方法を「教育と言っより訓練に近かったですね」と述懐していました。その結果、卒業すると翌日からスタッフとして活動できる実践力が身に付きました。入学のころには二四人いたクラスメートは卒業の時には二人となっていました。聖路加女子専門学校は私立だったので授業料は高く、父親は牧師で子どもが多かったので「私は親戚の援助を受けて卒業できたのよ」と語っていました。

卒業後は聖路加国際病院内科病棟に勤務

一九三五年（昭和一〇）本科三年を修了、卒業と同時に聖路加国際病院に就職しました。鉄筋コンクリート七階建の超近代的な病院が完成し間もない時でした。病院の塔の上に輝く金色の十字架は銀座通りからも新橋駅からも見えませんでした。専門学校卒業生看護師の給与はインターンの医師より高額でした。「それは院長が病院の医療において看護師の役



聖路加女子専門学校卒業式 左から3番目がシュン (1935年)

Graduate		Programme	
Mitsu Kaneko	Chieko Ogata	Invocation	Rt. Rev. N. S. Binsted, D.D.
Miyoko Kawai	Sone Sakai		
Eiko Matsuda	Utako Suzuki	Song	Student Nurses
Shigeko Matsumoto	Shun Takahashi		
Suzu Mori	Yoshiko Taniguchi	Florence Nightingale Pledge	Graduating Nurses
Koto Niki	Fumi Utsunomiya		
Kimiko Yamaniishi		Presentation of Diplomas	Dr. Toyochichi Kita
Post Graduate			
Kun Sil Kim		Address	Rt. Rev. John McKim, D.D.
Sumako Kondo			
Kaneko Nasu		Kimi Ga Yo	
Sotoko Nakanami			
Misao Okuyama		Benediction	
Teruko Takeuchi			
Yoshi Takamura			

1935年卒業式の式次第

フィリピンの日本病院への派遣

割を重要視していたからでしょう」とシュンは話していました。この時代は感染症の患者が多く、特効薬はなく、ひたすら対症療法に頼っていた時代であり、看護の力は命を救う大きな働きをしていました。シュンは内科病棟でスタッフナースから主任へ、そしてスーパーバイザー（病棟部長）へと昇任しました。当時、スーパーバイザーは全員がアメリカ人看護師であり、その中であって唯一シュンだけが日本人でした。スタッフナースのころはポーランド大使のお宅へ派遣され、看護にあたったこともありました。

中堅の看護師として活躍していましたが、日本は中国での戦争が進んでおり更にその他の国へ広がる気配が近づいていました。アメリカとの開戦が近くなると、アメリカ人看護師たちの帰国が始まりました。遂に一九四一年（昭和一六）二月八日真珠湾攻撃によってアメリカとの戦争に突入しました。聖路加国際病院は看護の指導者を一気に失い、日本人だけで運営しなければならなくなりました。

日本はアメリカとの戦争開戦と同じくしてアメリカの植民地であったフィリピンへ侵攻し、一九四二年（昭和一七）から四四年まで占領し軍政を敷きました。軍政はマニラにあった聖ルカ病院を日本病院と名称を変えて日本の民間人のための病院としたのです。その病院の看護師を指導するために一九四三年（昭和一八）六月に聖路加国際病院から七人の看護師が、また慶応病院から医師が派遣されました。「ごとういう理由の派遣はよくわからなかった、でも宣撫的役割の意味があったのでしょ」と後にシュンは語っていました。この頃には、日本が攻略した南方諸島の陥落も始まり、東京においても敵機襲来に備えて防火訓練等が盛んに行われていました。

一年目のマニラはまだ平和でフィリピン人看護師たちへの指導が十分に出来て、生活も楽しめたと言っていました。その頃の教え子とは戦後も長く交流がありました。しかし、二年目（一九四四年）のクリスマスを境に戦況は大変化をきたしました。南太平洋の島々では物量豊かなアメリカ軍との死闘が繰り返されており、日本軍が駐屯する島が次々にアメリカ軍の手に落ちていきました。いよいよマニラにも空襲が始まり、日本人はマニラから脱出せよとも指令が来しました。日本人医師たちは病院に日本人がいるとアメリカ軍の襲撃を受けてフィリピン人たちに迷惑がかかるからと日本人職員・患者の撤退を決めました。最初は一般邦人とともに医療班の勤めを果たしながら車で移動していましたが、遂にガソリンが無くなり、徒歩で北へ北へと歩きました。野宿をしながら食糧はジャングルの中で食べられるものを探して食べました。靴はボロボロとなり最後ははだしでした。ねずみや蛇が見つかる大御馳走でした。ジャングルの中ではもう歩けなくて置いてくださいと言う人、亡くなった人、死んだ母親の背中で生きている赤ちゃん、地獄絵を沢山見ました。そのような中でもシュンたちは下痢で下着が汚れた人の衣類を洗い気持ちよくさせました。

このような逃亡生活を八ヶ月した後、ルソン島北部のジャングルの中で一九四五年（昭和二〇）八月一六日に敗戦の報を耳にしました。この日から下山する一ヶ月間は非常に危険な目にありました。戦闘中に日本軍に家を取られ、また危害を加えられた山岳民族の人々が村に戻ってきて逃亡中の日本人を見ると危害を加えるようになっていました。日本病院グループは危険を避けて投降するために山を下り始めたそのときに、運よくアメリカ兵と遭遇しました。日本病院職員はいつも身分を示すために赤十字のベルトをつけていました。だからアメリカ兵と遭遇した時に「あなたたちはナースか？」と質問を受けました。英語で問われてさっと英語で答えたと言います。やはり看護学校時代の英語で受けていた授業がしっかり身につけていました。アメリカ人兵士は、病気の日本人女性を保護したものの言葉が通じないで困っ

ているのですべて手伝ってほしいと要請しました。

捕虜収容所にて

捕虜収容所には日本兵がやせ衰えて収容されていました。シュンは衛生兵だった人たちと看護師のグループリーダーとして病人の看護にあたりました。アメリカ人軍医からは絶大な信頼を得ていたと言います。絶大な信頼とは英語で業務上のコミュニケーションが出来たことが大きかったようでした。シュンの時代の聖路加の看護教育はアメリカ人看護師により行われていましたから、英語には不自由はありませんでした。収容所で四ヶ月を過ごし、三年ぶりに大寒の日本に帰国したのは一九四六年（昭和二一）一月三日のことでした。九州の佐世保に上陸し、品川駅まで無蓋列車に乗りました。品川駅に降りて驚いたのは駅の周辺には家は焼け落ちて何も無く、遠くまで見渡せることでした。復員者には無料の食事券を渡されていたので駅の食堂に入り食事をしましたが、出てきた食事は大根入りの麦ご飯と味噌汁に二切れの沢庵だけでした。収容所で十分な食事が与えられていたので改めて国が敗れたことを実感させられました。品川駅から三原橋（現地下鉄東銀座周辺）行きの電車が見えたのでモンペを着た多くの女性といっしょにその電車に乗り、終点の三原橋で降りたものあたりは焼け野原で聖路加国際病院に行くのに方角がわかりませんでした。シュンは丁度通りかかったアメリカ兵が乗っているジープを止めて病院まで送ってもらいました。病院につくと病院はアメリカ軍に接収されて軍の病院となっていました。聖路加国際病院は少し離れた元宣教師の住宅に病院本部が移っていました。それから二週間の休暇をもらい、北海道に帰郷し、その後病院に復職しました。しばらくは日本の生活のリズムに順応するのが大変でした。



デトロイトのウエイン大学留学中クラスメイトと共に (1948-49年)



アメリカ留学から帰国した聖路加卒業生達 (奥からシュン、中道、金子、湯槇)

帰国して二年が経過した一九四八年(昭和二三)、戦後初めての女子留学生四人(湯槇ます、金子光、中道千鶴子)の一人としてアメリカのデトロイトにあるウエイン大学に留学しました。

ウエイン大学留学・アメリカの看護を学ぶ

シュンはウエイン大学でミス・ビーランドの薫陶を受けることとなりました。この四人の留学はGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)看護課で企画され、ロックフェラー財団が資金援助し、日本の看護教育のリーダーを育成するのが目的でした。アメリカ人看護師から見た当時の日本の看護はレベルが低く、看護師は医師の手伝い的存在としか映りませんでした。看護師のしていることは看護ではなく検温、与薬、医師の介助といったところで、患者さんのケアと精神的な支援はもっぱら家族に任されていました。

ウエイン大学では内科・外科看護学とその教育法、ならびに臨床指導の原理と実際のコースを専攻しました。コース担当者はミス・ビーランドでコース専攻者は臨床看護実践の経験者でした。このコースは何を学ぶかと言つことよりも「如何に学ぶか」というものでした。今までのシュンの学びの経験では講義録とテキストを使っており、「如何に学ぶか」というやり方はありませんでした。

担当のミス・ビーランドは生理学で修士号を得られた方で、患者さんの症状についてその根拠を論理的に説明してくれました。病態生理の知識が多くあり、そのクラスはインテグレートされた構成でした。学習目的と概要は明確に示され教授されていました。学生の実習は担当教授が学生の受け持ち患者さんを選択し、学生は個別に臨床実習指導者の指導を受けました。ミス・ビーランドの教育は起きている現象に対してなぜそうなったのか、なぜ、そうなるのかの論理

を徹底して学生に求めたのでした。シュンが留学していた一九四八年のアメリカは戦争に勝った国でありながら多くの問題を抱えていました。多くの若者が徴兵され認識票を腕につけて戦死しました。この兵隊たちは消耗品と考えられていました。しかし、戦争が終了し落ちつくこと、ひとつは国の消耗品ではないという思想が広まり、ひとつは一人の間であり、かけがえのないたった一回の地球上における生命であると言われ始めました。

「一人の人間」としての思想

看護教育は知識や技術の伝達だけではないところに難しい問題を抱えています。時に看護はその対象が「痛みや悩みを持つ人」であり、その人々がその人なりの生活が出来るように支援するには看護者にどんな教育が必要とされるか、答えは一つではありません。実習が終わるとミス・ビーランドはよく食事に誘ってくれました。食事をしながら楽しい会話がありました。教師と学生がその全人格を通して語り合えることが出来ることほどなんにか必要なことでしょうか。教師と学生の個人的な会合では学生が授業中には理解出来なかったことも理解されることが多く、いつもは沈黙している学生も多弁となることが多くありました。このミス・ビーランドから得た教育方法は、その後シュンの教育の中でいろいろな形となり継承されました。

留学から帰国、教師として活躍

一九四九年（昭和二四）帰国し、聖路加女子専門学校教授に就任しました。当時校舎はアメリカ軍に接収されており、日本赤十字社構内において東京看護教育模範学院という名称の下に聖路加と日赤、二つの専門学校が同じ教室で教育を

受けていました。教育はGHQ看護課の指導の下運営されていました。ここでは聖路加女子専門学校及び日本赤十字女子専門学校の学生に教えていました。そして後にこの卒業生の中から多くの看護リーダーを生み出すことになりました。占領時代が終わりシュンたちは一九五三年（昭和二八）に明石町にある校舎に戻りました。シュンは十数年、臨床看護の現場に身を置き、また捕虜収容所という非日常的な看護の現場を経験し、留学とその後の経験を通して看護教育のあり方を模索していました。一方でクラスメートの金子光が国レベルでの看護行政の改革に取り組んでいました。

二人は厚生省、文部省管轄の看護教育機関の教員および国公立、私立大学病院看護管理者を対象として講習会を頻繁に企画・実施し、看護の質量の強化を図りました。また、教授としての傍ら諸講習会の講師、看護協会役員、WHOセミナーの日本代表など多忙な日々を送りました。

シュンの授業では実にたくさんの実例が紹介されました。授業中に一人芝居でその情景を再現するのがとても上手でした。小さいころから演芸が好きで、フィリピンへ船で移動の時も、攻撃される恐怖と命の心配で気が滅入っている仲間を元気づけるために機会あるごとに劇をやり、みんなに笑いを運んだと言われます。シュンは臨床看護の長い経験を生かして現職看護師たちを対象とした講習会を多く実施し、自ら講義しました。受講生はシュンの講義を聞き自分たちの日常の業務に意義を感じたそうです。

後輩へのメッセージ・IIIのHI

心(H e a a a a a t) 頭(H e e e e e e) 手(H a a a a a s s)

シュンは、看護はIIIのHIが必要ですが、と大きく話していました。「看護は心(H e a a r t) 頭(H e e e a a a) 手



聖路加短期大学卒業式の礼拝 前列左から4番目がシュン（1958年）

古今聖歌集四九九番

- 一. みなもと にごりて きよきすえはなし
いのちの ながれの はじめをつつし
わかき日を かみの みまもりにゆだねん
- 二. あたら としじきを むなくすごさば
もとには かせらす ちりゆくはなびら
つぼみの うちなる いまこそいそしめ
- 三. いそしみ まなびて みちからにたよらん
かみを おそるるは ちえのはじめなり
ちえは くらきよの たびじのともじび
- 四. みかみよ われらを みちびきおしえて
ことば おこないに みひかりをくわえ
まなびの にわをば てらさしめたまえ

シュンは折に触れて古今聖歌集499番を学生に紹介した

(Hands)を融合させ、他の医療メンバーと協力して働くことです。このすばらしさと満足、喜びをあなた方に味わってほしいと願っています」と一九六六年（昭和四二）の母校の創立記念日の講演で参加者にメッセージを送っています。この思いはシュンの看護と看護教育に携わっての一生の信念でした。

また、一生をおして強調していたのは精神（スピリット）と科学（サイエンス）及び技術（スキル）の正三角形が看護を支えているということでした。この思想は専門学校時代に基礎看護の教師であったミス・ピーターズから聞いており、シュンの体の中では血となり肉となっていたのでした。各々の辺の配置はどのようでも良いとは言えず、シュンは精神（スピリット）を底辺において正三角形を描くことを考えました。精神（スピリット）とはその人の哲学、やさしく言えば、その人の看護に対する思い、人間に対する思いの「思い」です。これをしてあげれば、この人は楽になるのに、これをしてあげたいな、という「思い」だと強調していました。看護は知識や技術だけで対応できるかもしれないがそれは表面上の看護であり、心からの看護ではないと話しています。「看護する相手は大切な人なのだ」ということをいかなる時も看護師は心に刻まねばなりません。

学部長時代

一九七五年（昭和五〇）に聖路加看護大学学部長に就任しました。一九六〇年代後半から起きた大学紛争は、規模の小さな聖路加へも押し寄せてきました。大学になっても伝統的な全寮制による教育が続けられていましたが、学生たちの要望により全寮制は廃止されました。大学における看護教育とは何か？ということが盛んに議論し始められました。それを機会にカリキュラムの見直し、教員の研修などが開始されました。シュンの学部長マネージメント改善は「開

れた大学にする」ということでした。学部長室にはいつでも誰でも入りやすくなるように常時ドアは開かれていました。それまですべて非常勤だった一般教養科目担当教員も一部を常勤としました。また卒業生で固められていた教員に他大出身者が採用されました。会議日を定例化し、教授会に議題を提出するための学事会議、教育会議が始まりました。スタッフミーティングでは誰もが自由に発言できる雰囲気を作られました。教員一人ひとりが看護教育を如何にしたら充実したものとし、効果を上げることができえるかを考え論議しました。一方、我が国の看護教育の形態も、高等看護学院から短期大学へと移行するようになってきました。四年制大学も次第に増えてきましたが、どこでも有資格教員の人材不足が問題でした。そういう事情の中で厚生省の教員指導者の講習は三ヶ月から六ヶ月へと延長されるようになり、文部省の教員研修は一年となりました。聖路加看護大学では文部省の看護教員一年コースの研修生も受け入れていました。この頃に看護系六大学協議会が発足し、この会で教育上の問題が盛んに討議されました。この会は今日の日本看護科学学会が発足する契機となりました。一九七八年（昭和五三）には学会創立準備会が出来、一九八一年（昭和五六）に第一回日本看護科学学会学術集会が開催されました。この学会発足に当たっては聖路加看護大学の教授たちが大きな働きをしました。

学会活動が盛んになるにつれて、シュンは「人間を理解する、或いは気持ち悪いやることは学識だけでは出来ません。人間と人間が向かい合い、目を見ながら話し合うことの大切さは、いつの時代になっても変わらないのです。看護記録も、申し送りも、患者さんの観察でさえもコンピュータでやるようになると、患者さんや家族との接触が面から点に変わってしまう可能性があります。教える者も学ぶ者もこのことを覚えてほしいと切に思います。いかに科学が発達しようと看護には変えてはならないものがあります。例えば全ての人の人格、人権を尊重すること、人々に謙虚な心と態度で接

することなどは、いつの時代の看護にとっても必要不可欠なことです。そうした姿勢で多くの体験および経験から学び、自らを培って欲しいのです。」と機会ある毎に話していました。

大学教員の人材不足は大学院設立へと拍車をかけました。教職員の修士課程開設への努力が実り、一九八〇年（昭和五五）文部省の許可がおりて大学院開設が認可され、シュンは研究科長に就任しました。研究科第一回生の修了生を輩出した一九八二年（昭和五七）、シュンは聖路加看護大学を退職し名誉教授に就任しました。学部長在職七年間に腐心したことは教職員一人一人を大切にしたことでした。また、シュンの学部長時代の成果として、自主・自律的な教育姿勢が浸透したことが挙げられます。それは、カリキュラムが強化されるに従い教員の行動も役割も変化し、自主的に学習する雰囲気醸成されたこと、各研究室の教員により学生が自ら学ぶ学習活動の準備を整えるようになったことなどに現れました。シュンはそのために図書館の充実、視聴覚教材の充実など教育機材の購入のための資金を積極的に集める努力をしました。シュンの約一五年にわたる病院勤務の経験はシュンの組織管理能力を強めるのに役立ちました。またフィリピンで空爆されながらの逃避行の過酷な経験、それに耐えられたシュンの信仰はその後の人生のあらゆる場面で立ち上がる力に変えられていきました。

退職後の松江での生活、そして新生の園での晩年

聖路加看護大学を退職して間もなく、シュンは松江市に住む妹家族の隣に引っ越しました。日曜日には妹と一緒に教会への出席を欠かしませんでした。教会での活動や島根県に新設される看護短期大学への支援、そのほか多くの看護協会の講演会や老人大学の講師としてかなり多忙な生活をおくりました。



清里の清泉寮で友人と過ごした際、学生と交流した（2001年）



シュンが学部長時代、共に大学院開設に尽力した日野原元学長と（2001年）

九〇歳までは元気に聖路加看護大学理事会への出席も続けていました。その他の用事で出かけることも多い毎日でした。しかし、妹夫婦が体調を崩し、一緒に住めなくなりました。教会の友人たちが教会に近いところに高齢者住宅を探し引越しをしました。二〇年住んだ家からの引越しは、その準備に九〇歳を超えての体にかなり体力を消耗させたと思われました。高齢者住宅では食事が提供されますから自炊することも無く、同じ住宅に住んでいる人たちとおしゃべりも出来て、街中に近くなったので訪問してくださる人もあり、一人で歩くことも出来て三年ほどは楽しく過ごすごとができました。しかし、その間入院治療などもあり、体力も気力もだんだんに弱ってきました。松江には妹家族しか親戚が無いことを心配した教会の人たちは、どこかシュンが安心して信仰生活を送りながら余生を過ごせる施設は無いものかと探し始めました。

日本聖公会関連の施設が和歌山県、三重県、群馬県にあることが紹介されました。やはり東京に近い群馬県高崎市にある新生会の施設が、弟の住むつくば市に近いことなどから第一候補となりました。最終的に北海道に住む末の弟と筑波に住む義妹が新生会の施設を訪問し、移転が決定しました。後から聞いた話では受け入れ側も看護の大御所と聞いてかなりの緊張と心配をしたそうです。そのあと、本人の納得をいかに得るかが問題となりました。それは、私はこちら（松江の高齢者施設）で最後まで暮らすことにしたとシュンが話していたからでした。退職後世話になった妹と離れたくない、おいていくのは心が痛む、せっかくなじんだ松江の教会から離れたくない、など多くの理由がありました。そして最終的に引越しを決意させたのは新生の園に行く構内に教会があり、祈りの生活ができるということでした。また何よりも心が動いたのは、シュンが聖路加女子専門学校の生徒だった頃にまだ五歳だった、聖路加病院礼拝堂チャプレンの故竹田司祭の息子マコちゃんが、新生の園の近くに住んでいることでした。マコちゃんとはその後やはり牧師

となり、日本聖公会東京教区主教や管区主教を歴任した竹田真司祭のことです。シュンは周りの人の名前を全部忘れても最後までマコちゃんのごことは認識できました。

二〇〇八年（平成二〇）九月に高崎市榛名山山麓にある新生の園へ引っ越しました。受け入れに関しては新生会の職員が松江にシュンを訪問し、移動の手はずを整えてくれました。新生会にとっても九五歳の高齢で遠方から入所する人は初めての経験でした。その日はつくば市から迎えに来た義妹と松江の教会の友人が付き添いました。出雲空港から羽田空港へ、そして新生会の車で高崎市の新生の園へ。出雲空港から羽田へは松江に引っ越して以来何十回と仕事や私用で往復をしましたが、これがシュンにとつての最後のフライトとなりました。

高崎は東京から近いので折に触れて卒業生がシュンを訪ね、シュンの榛名での楽しみが増えました。卒業生でない人でも、「私の教子よ」と職員の方に紹介していました。シュンにとつて、卒業生はそれほど特別な存在ではありません。

二〇二三年（平成二五）四月の誕生日には卒業生数名が訪問し機嫌よく祝いました。六月まではまだ話がでる状態でしたが、七月に入り急に衰弱が進み、とうとう一七日に九九歳の生涯を終わり天に召されました。新生の園での生活は葬儀の折の園長の挨拶にゆだねます。

新生の園の生活（園長柳沢啓一氏による）

高橋シュンさんの旅立ちに際しまして、謹んで哀悼の意をお捧げいたします。

高橋シュンさんが新生の園にご入居されましたのは五年前の平成二〇年九月一七日でした。島根県松江市からのご入居でした。私にはこの時二つの心配がありました。一つは、松江市からの長距離移動が当時九五歳だったシュンさんの体に大きなダメージを与えてしまうのではないかとということ。これについて私どもは身構えておりましたところ、羽田空港での最初の挨拶の時から屈託のない笑顔で「暑いのにご苦労様ね」とねぎらいの言葉を下さり、後は付き添いの啓子さん達とガツハツと笑いながら冗談を言い合ってらっしゃる。そちらの不安はもうこの時に吹き飛びました。移動にあたっては営業担当を中心に弟の農夫也さんや義妹の啓子さんと時間などについても綿密に打合せ、飛行機と車で移動し、体力消費を最小限にしてなんとか無事に新生の園に到着していただくことができました。入居後も体調悪化の症状がでることなくいわゆるソフトランディングに成功し、新生の園の生活を順調にスタートしていただくことができました。

もう一つの心配は、輝かしいご経歴とお写真で拝見した威厳のあるお顔の表情から、おそらく厳しい感じの方だろう、特に我々の仕事に近いものがあるわけでいろいろご指摘を下される感じがな、と考えていました。シュンさんは入居後は毎週教会に通われ、ケアを受けながら穏やかな日々を過ごされてらっしゃいました。時には職員と冗談を言い合い、時にはご自身の経験を端的に語られたり、時にはイチゴ狩りでびっくりするぐらいイチゴをほおばられたり、シュンさんとの関わりの時間は、私たち職員にとつても癒しの時間でありました。徐々に衰えてはいかれたものの、入居後の四年は平穏に過ごされておりました。

昨年の六月に心不全の症状が出て約一ヶ月半榛名荘病院へ入院されました。七月二〇日に退院されましたが、体力低下は否めませんでした。もちろん教会へも行けない日々が続きました。退院後、私たちはカンファレンスを行い、シュンさんにとつて何が一番大事か、もちろんお体の回復を基本的に考えるのですが、なぜシュンさんは新生の園を選ばれた

のか？介護ホームなら松江にもあるし、東京にもたくさんある。新生の園を選ばれた理由は、やはりそこに教会があるからで、ならば教会に通ってもらうことを目標にしようと思えました。すぐに足腰のリハビリが始まりました。シュンさんにとっては大変だったのですが、拒否は一度もなく、週二回理学療法士による起立訓練や立位保持訓練を一生懸命受けられました。その他日常生活の場面でも極力足腰を使うよう私たちも協力いたしました。お食事も退院直後はペースト食でしたが四ヶ月後には常食を召し上がれるまでになりました。座位を保つのがやっとだった状態から支え歩行ができるまでに回復されました。

そして一月一八日に退院後初めて教会へ出席されました。半年ぶりでした。その時のケア記録には、「久しぶりの出席だったため秋葉司祭が皆さんに紹介してくださり、拍手をもらおうと頭を深々と下げ涙ぐまれる。」とあります。

シュンさんのがんばりもあり、順調に回復されていたのですが、年が明けて今年に入りますと、下痢が始まりました。感染症の疑いもあり、そうなる教会へ行けなくなりました。今年の一月六日が最後の教会礼拝となりました。

いろいろ原因を調べ内科的な治療が施されましたが、下痢は最後まで回復しませんでした。幾人かのドクターは一樣に年齢的なものだとおっしゃいました。栄養を入れてもほとんど消化されず出てしまうわけですから、みるみる痩せてしまわれました。六月に入るといよいよ食事が摂れない日が続ぎ、エンシユアキッドはよく飲んでいただけましたのでこれを中心に、覚醒がされない時は点滴で補うということでのいでありました。しかし、この頃になりますと衰弱のため、一日のほとんどを朦朧としながらベッドで過ごされるといいう状態でした。七月に入りお風呂の時に職員が痩せたお腹を触るとしごりのようなものがあることに気付きました。すぐにCTを撮り外科の先生に見てもらったところ腹腔内に腫瘍があり、それが胃を圧迫して通過障害を起こしかけており、おそらく下痢の原因もこの腫瘍からだろうとの



榛名から聖路加礼拝堂のイースターに参加した（2009年）



教え子の来訪に喜び「ちょっと待って、写真を撮すならちゃんとしなくちゃ」と帽子をかぶる（2013年4月）

ことでした。衰弱がひどく微熱が続き、最後の時が迫りつつあるのを誰もが感じておりました。

そして七月一七日午後十二時十二分、シュンさんは天に召されました。私は看護師二名とシュンさんのその瞬間を看取らせていただきました。非常にゆっくりな深呼吸を五回ほどされ、最後大きく息をはき出され、そのまま呼吸が止まりました。静かな最期でした。

新生の園を人生の終着駅として選ばれ、九九年のご生涯の最晩年をお過ごしいただいたことに心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

ご冥福をお祈りし、お別れの言葉とさせていただきます。

平成二五年七月二〇日

社会福祉法人 新生会 有料ケアホーム新生の園

園長 柳沢啓一

第Ⅱ章 看護教育とシユン



学部長時代 卒業式で挨拶するシユン



東京看護教育模範学院時代の聖路加女子専門学校看護教員
前列左から湯横・White・高橋、後列左から前田・檜垣・白井・吉田諸先生



日赤と聖路加の合同卒業式 2列目右から2番目がシュン先生（1951年3月）



若い時代の看護の喜び体験ーシュン先生から学んだ多くのこと

川嶋みどり

シュン先生との出会いは看護の真価との出会い

私と高橋シュン先生との出会いは、まさに私と「看護の真価」との出会いとさえ言えます。

それは、日本赤十字女子専門学校三年次（一九五〇年・昭和二五）の春の小児病棟実習中に、先生の臨床指導を通じて動機づけられ、引き続き卒業後も、その小児病棟の看護師として出会った、さまざまなる事象と看護実践の数々を、シュン先生とともに考え討論したことを通じて培われたと思います。

日赤女専の学生であった私が、何故、聖路加女子専門学校の高橋シュン教授の指導を受けたのか、それは、敗戦で、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指導のもと、看護改革の重点策としての看護教育のモデルスクール創設によりです。当時、校舎を接収された聖路加女専が学校ぐるみで日赤女専の校舎に移って来たのは一九四六年（昭和二一）六月のことだったといえます。両校を合体させた東京看護教育模範学院を創設するためです。その日から背景の異なる二つの学校が同じ場所で教育を開始したので、その後日赤女専に入学をした私も、シュン先生の指導を仰ぐことになりました。時代の背景があったとはいえ、その幸運を思わずにはられません。

実習重視の東京看護教育模範学院のカリキュラム

明治以来、博愛の赤十字精神を掲げて戦時救護看護婦養成を目ざしていた日赤と、戦前からキリスト教を基盤として文部省認可の高等教育を行っていた聖路加との共通点は、入学資格が高等女学校卒業ということだけであった。校風も学生気風も全く異なっていたのは当然です。いくら占領軍の指導があったとはいえ、両校ともに多くの葛藤があったことであろう。その学生たちが教室も実習先も共通で、同じ屋根の下で寝食を共にしながら学生生活を送ったのです。これは、日本の看護歴史上特記すべきことであると思います。

教科書も教材もない中で、ひたすら筆記をした授業でしたが、講師陣は当時の一流の先生方でした。年間の総実習時間週数は、当時の指定規則の一〇七週を三〇週以上も上廻る本学院独自のカリキュラムでした。全員が寮生活で、毎朝五時半に起床、朝食を済ませてから、六時四五分からは宗教部の学生の司会により、全学生共同のキリスト教礼拝の後、讃美歌のピアノ演奏を背に、長い廊下を三々五々病棟に向かいました。午前七時から午後七時までのあいだに授業と実習が組まれていました。時間数にすると、一年生一四四八時間、二年生一七七五時間、三年生は一八九七時間にのぼっています。その間に、準夜・深夜勤実習がそれぞれ四週間ずつあり、小児と分娩室以外は学生の一人夜勤でした。

劣悪な実習環境のもとに颯爽と

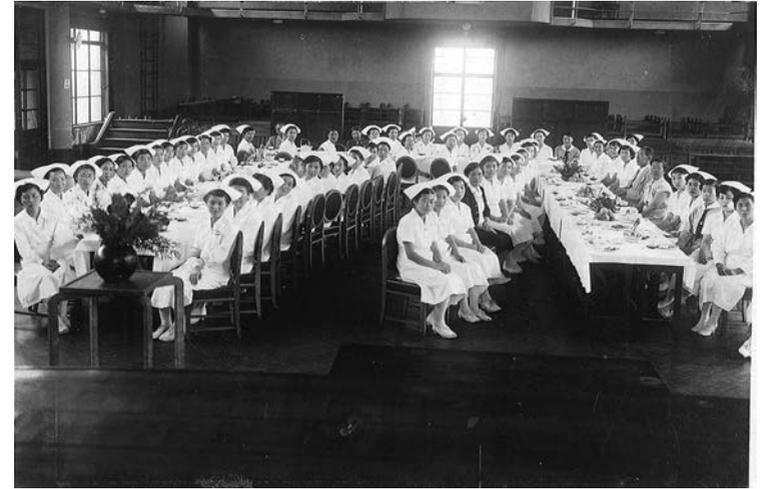
実習病院は日本赤十字社中央病院（六五〇床）で、校舎からは廊下続きで行けるメリットはありましたが、空襲の影響を受けて、そのハード面の環境は、今では想像のつかない劣悪なものでした。焼夷弾の延焼を防ぐために天井板はがされて、見上げれば太い梁が剥きだしになっていました。冷暖房設備は全くなく、冬は、ガラスの入っていない窓から寒風が容赦なく吹き込み、シユン先生の言葉を借りれば「雪が足元から降って来る」状態でした。患者さんの寝具は、「毛ウフではなくフー」と評されるくらい、毛の部分が摩擦して数枚重ねないと暖がとれぬ代物でした。夏の盛りには草むらのヤブ蚊が網戸のない窓から無遠慮に侵入して来ましたので、各ベッドには蚊帳が取り付けられ、その上げ下ろしも学生の夜勤実習中の大仕事の一つでした。

病棟で日々反復して行ったモーニングケアにイブニングケア、その前後の看護行為の数々を実習と称して行いました。授業の休講時も日曜・祭日も病棟勤務要員数に組みこまれていましたから、実質的には看護師の労働力の補完ともいってべき位置づけであったことは、実習がpnnと呼ばれていたことから明らかでしょう。

そのような折、すりりとした上背のあるシユン先生が、まわりと三つ編みにした頭にブラックラインの入ったキャップをのせて、真っ白なナイロンのユニフォームにストッキング、白革靴という姿で颯爽と廊下を闊歩された姿は、今でも印象深く記憶に残っています。一九四九年（昭和二十四）、ウエイン大学での留学を終えて帰国されたばかりのころでした。未だ、戦時中の名残のカーキ色のユニフォームを着用した赤十字の先輩看護師たちの姿も珍しくない頃でした。

看護の本質にアプローチする濃密な臨床教育

シユン先生との出会いと学びは、小児病棟一一週間の実習期間を土台にしたものでしたが、卒業後も希望の職場での看護師として先生の臨床指導の方法を学び、目の前の病児の看護を考え実践した日々は、今思い出しても何と濃密な知と技の凝縮された時であったことでしょう。前述したように、現在では想像もつかない悪条件のもとでの創意と工夫が続く毎日でしたが、思い出すエピソードは数十年を経た今も鮮やかです。しかも、単なる個人的な懐かしさにとどまり



合同教育終了時に、日赤を去る聖路加学生の送別会が開かれた（1953年）



日赤・聖路加教員の合同合宿 左から川嶋（筆者）、シユン先生、浅田先生（1953年鎌倉アリスの家：現聖路加国際大学セミナーハウス）

ません。時々、その底に流れる看護の本質を掬い取ることができたのです。つまり、医学的な専門領域の違いや成長過程に添った看護区分がどのようであっても、看護は一つであるという実感を持ち続ける力が自然に育まれて、今日に続いているのです。

ところで、東京看護教育模範学院での教育は七年半続きましたが、築地の校舎の接収が解かれて聖路加女専が広尾から去る時、私は小児病棟勤務から母校の教務の末席に名を連ねていました。改めて考えて見ますと、シユン先生が教育の場にお身をおいて看護学生にしっかりと向き合っていて意欲に満ちた教育実践をされた最初の五年半を、学生として病棟スタッフとして、さらに教員として一緒にさせて頂いたこととなります。その後は聖路加と合同のクラス会や学会等で目にかかる機会もありましたが、看護系の雑誌等での対談や座談会を通して、先生のお考えに触れる機会も少なくなりました。これは、未熟な時代の私の主観的な学びを普遍化させて頂く上での好い機会にもなりました。

心に響く場面の数々

学生時代に小児病棟でシユン先生と共有した時間の中での印象的な事例を紹介します。

(一) 全身湿疹で入院して来た女の子

当時の小児病棟には、戦後間もない世相を反映した患児の入院も珍しくありませんでした。ある日、渋谷の飲食街のゴミ捨ての中から拾われた小さな女の子が警官に抱かれて入院して来ました。悪臭を放つ布きれに包まれ、か細い声で泣くその子の全身の皮膚は、脂漏性湿疹様の痂皮で覆われ、赤くただれている部分もありました。余りにひどい状況に、どこから手をつければいいのか当惑し立ちすくむ私の耳元で、「ホウ酸綿とオリーブ油、それから洗面器にお湯を入れて

持っていらつしゃい」との声がありました。シユン先生でした。ユニフォームの袖をまくって、シンクの前で両手を洗う先生の姿を視野に入れながら、指示された品を急ぎ持参しました。乳児のベッド柵を下ろし、腰をかかめて先生は、ホウ酸綿で目のケアをしながら、「目がしらから目じりに向かって一方通行で拭くのよ」といい、次いで、オリーブ油をたっぷり浸した脱脂綿で全身をくまなく丁寧に拭きました。その後、洗面器の湯にガーゼを浸して片手でしぼりながら、頸部や腋窩、鼠径部などを押さえ拭きした後バスタオルで全身をくるみ、さつとおむつを当てて病棟の寝衣を着せました。この一連の操作はまるで流れるように美しかったことを記憶しています。

傍目にもさっぱりした女兒を抱き上げ頬すりしながら「きれいになったね。よかったね」と語りかけ、「何を見ているの？早く小児水を持っていらつしゃい」と指示されました。小児水とは、入院中の病児たちの脱水を防ぐために調製された1%の重曹水とグルコースの入った飲料水で、随時飲ませることができるよう蛇口のついた大瓶が常時病棟におかれていました。

その日のカンファレンスでは、「あの子の体重は？」「だったら体重1kg当たり何ccの水分が必要？」「ミルクの濃度と量は？体重から割り出したカロリーから算定して見て」と、質問の矢は当事者でない学生たちにも放たれました。たじたとする学生には、容赦なく次の質問が浴びせられ、答えに窮して涙ぐむ学生とともに、先生も鼻をグスグスさせながら胸のハンケチを取り出すのでした。学生に感情移入しながら指導されるスタイルは、他の教員には見られないシユン先生独自のパフォーマンズであったと思います。今でも、当時は偲ぶ卒業生らのよい思い出にシユン先生が登場する所でもありましょつ。

(一) 離乳食の味

ミルクから固形物に変わる乳児に対して処方される離乳食は、他の子どもたちと同様に栄養科で調理されて病棟に運ばれてきます。ほんの少量ずつ小さな小鉢や小皿にのせられたマッシュされた野菜類やスープを、スプーンの先へのせて食べさせようとするのですが、ゴムの乳首からの哺乳とは勝手が違って、看護師も乳児も困っていました。そんな折「その離乳食を、あなたは自信持って美味しうって食べさせている？」との質問が頭の上から飛んで来ました。「う」だって、患者さんの食事の味を見ることなんて許されていませんから、わかるはずありません。「考えてごらん、この子は生まれて始めて液体から固形物の食事になるのよ。もし、このマッシュ人参がまずかったら、この子は一生、人参嫌いになるかも知れないのよ」と。

確かに、乳児の味覚は、その子の一生の嗜好を左右する可能性があるとするれば、自信を持って「美味しいからさあお口を開けてご覧」と言えるような食事援助の姿勢と、調理された食事そのものに関心を持つことを教えられました。このエピソードは、「食べることは生きること」として、急性期からターミナルまで各病期における経口摂取の価値づけを主張する私の原点ともなっています。

真のロールモデルとしてのシユン先生

人生のさまざまな場面でのロールモデルの存在は、その影響を受けた者の将来を左右するといえます。看護の場合でも、優れた先輩のわざを始め人間関係に至るまで、具体的な場面やその時々のお話を通じて学ぶことは多くあります。それは、単なる手技のデモンストレーションではなく、多彩で流動的な環境のなかでの、「気づくことへの同意」がもた



当時の東京看護教育模範学院教員たちがアメリカのテキストを元に作成した日本語の教科書「看護実習教本」



辞書を傍らに原書を読む先生（1951年頃）

らす学習形態とも言えます。小児病棟実習期間中にシュン先生の示されたロールモデルは、今とは極端に違った貧困な環境のもとでありながら、臨床実習の概念の未成立期における優れたロールモデルの提示でした。それは、第三者的な傍観者や観察者としての助言やコメントではなく、看護を必要としている患児たちそれぞれがその場で必要としている具体的なケアを、その場、その時に応じて実践して見せるという方法でした。その一つ一つが、感受性が鋭く吸収力の強い学生たちの印象に強く焼きついたことは確かですから、その意味からも真のロールモデルの提示と言えましよう。教師自身の看護観と身体ツールを使った看護実践そのものを学生の目の前で見せるこの方法は、昨今の臨床実習でも、もっとも欠落している部分でもあり、学生の実習記録を通じてのみの指導では達成できないと思います。

臨床指導者は職場環境の変革コーディネーターでもある

シュン先生のこの臨床実習指導モデルの陰には、先生のなみなみならぬ努力と研鑽がありました。「一方は軍隊式、一方はバタクさい環境で育って、いわば水と油のようなものでしょ。そうした環境の中でどのようなアプローチができるか。それには、先ず実習病棟の看護師たちとの話し合いが必要だと思い、そのためにもフルエネルギーを投入して教案をつくったのよ。だって実習だって授業と同じだし、先ず臨床の赤十字の看護師たちと仲良くなって共通の考え方で指導しないとうまく行くはずがないじゃない？だから、寮に帰っても火の気のない部屋で手袋をして、教科書の翻訳をしたり指導案をつくった。そして、この指導案を使って病棟のスタッフとカンファレンスをしたの」と。

この言葉は、臨床指導者が単に学生の指導をするだけの役割ではないことを教えていると思います。つまり、臨床実習指導者は、臨床の場における人間関係や職場環境をアセスメントし問題点を浮き彫りにするだけでなく、よい方向

に向かって改善する努力を惜しんではならないという事です。

私にとつてのシュン先生は、看護の面白さ、喜びが実践の中に豊富に潜んでいることを身をもって教えて下さった優れた真のロールモデルでありました。それだからこそ、こつして六〇年以上も決して平坦ではなかった看護の道を歩き続けて来られたのだと思います。

その教えの一端を広めることこそ、恩師シュン先生の御霊を慰めることに通じると信じています。

(本稿は、看護展望二〇一四年一月号(三九巻一号)に掲載した「真のロールモデル高橋シュン先生との出会い」を再構成し加筆したものである。)



聖路加短期大学時代―パッションの教育者、ロジカルな実践者

岩井 郁子

一九六一年（昭和三六）に出会い二〇一三年（平成二五）にお別れたシユン先生との五〇年余に渡る思い出を紡ぐ時、「看護する大切さ、喜びを全身全霊で多くの人々に伝えた先生」「聖ルカを愛し、多くの方々から『おシユンさん』と愛され、聖ルカと共に歩んだ先生」「おしゃれで、キュートな先生」……と、様々な「高橋シユン先生」が私の中にいます。

ナイチンゲール記章授与式での皇后陛下からの「看護に注がれた真摯な情熱と、病み苦しむ人々に寄せられた深い慈しみの心」というお言葉は、先生の歩みの中での深い体験にもおもいを寄せた「賛辞」と、感動して聴きました。

私は、一九七一年（昭和四六）から教員として聖路加に勤め、先生の下で成人看護学を担当しましたが、このエピソードはそれよりも前、一九六四年（昭和三九）までの聖路加短期大学時代に主に焦点を当て、個人的なエピソードは共に仕事をした一九七一年以後の事も含めて述べます。

初めの仕事

それは、入学試験の面接の時でした。三つ編みを今で言うカチューシャのように頭に巻き付け、スリムなユニフォーム姿で足を組み、「なぜ、看護婦になりたいと思ったのか」と、笑顔も見せず質問をした少し怖い先生との出会いでした。「足を組んで座る」という文化は、聖路加のテーブル付き椅子とも関連するのですが、やがて私達は当然のように足を組んで座るようになり、歩き方、話し方・言葉使い、挨拶なども先生方をモデルに「品位」をも学び成長したように思います。

一年生の時にはシュン先生の講義はありませんでしたが、キャッピングの時にナースキャップを付けていただきました。

シュン先生の看護教育をつないだ丸川和子先生（一九六一年）

最初に「看護」を学ぶ喜びを教えて下さったのは、基礎看護担当の「丸川和子先生」です。丸川先生は、基礎看護で、身体のしくみなどを根拠に、看護、看護技術を教えて下さいました。画家が描いたような解剖の絵を模造紙に手書きで書き、「小腸、大腸は……」と身体のしくみと働きを説明し、「ですから、このような体位で洗腸が行われる」というような、手順等の丸暗記ではなく、「なぜ」、「だから」という根拠を理解して最適な技術を習得するという教育です。

シュン先生のエピソードの中で、丸川先生を挙げた理由は、丸川先生はシュン先生の教え子で、先生の考え方を「基礎看護」の中に活かし、教育をしたのです。このことに気づいたのは、「看護計画の歴史」をひもといた時です。

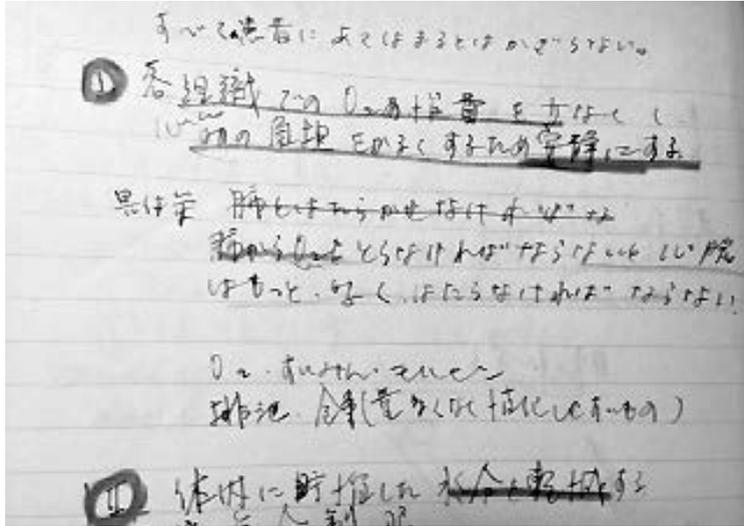
一九五〇年、雑誌「看護」（註一）に、生徒のページとして、聖路加二年丸川和子、日赤二年植田マサ（東京看護教育模



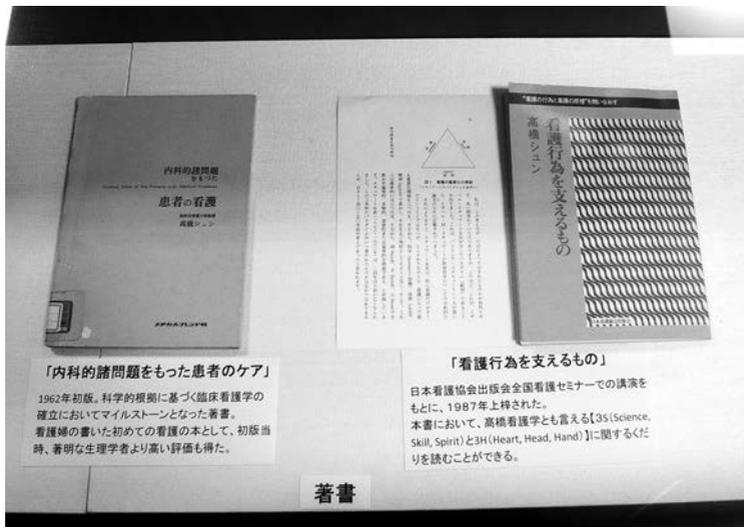
寮のキッチンにて同僚とお茶の時間 左より三上・丸川・高橋・吉田・杉本諸先生（1960年1月）



1年生のキャッピングでキャップをかぶせるシュン先生（1961年）



シュン先生の講義内容 心不全患者の看護として「各組織でのO₂消費を少なくし心筋の負担を軽くするため安静にする」とある



シュン先生を偲ぶ展示でも、3つの「H」の「高橋看護論」を紹介した（2013年10月聖路加看護大学歴史展示室企画展）

範学院)の共著で「ネフロローゼ、肺結核の四歳女兒の看護計画」が載っています。記載されている看護の考え方は、この後、シュン先生から学んだ「内科外科看護法」の教育内容・考え方と一致するのです。シュン先生は一九四九年九月アメリカ留学帰国直後小児看護を教えています。現在にも通じる日本で初めての看護計画は、シュン先生によって教育された事もわかります。

教育は、このように次の時代へと「看護」を紡いでゆくものだと、今も聖路加の看護教育そして看護実践の中に見いだす事ができます。

シュン先生の看護の考え方、講義で強調したこと

一九五一年から一九六七年迄の看護基礎教育カリキュラムは、病気中心で、「疾患と看護」を学び、実習は、週単位の訓練型でした。私は短大三年生で虫垂切除術の直接介助も出来ましたし、夜勤実習も準夜勤務一週間、深夜勤務一週間でした。

一九六二年、短大二年次で内科外科看護法が始まりました。内科学は、橋本寛敏学長が担当し看護との関連性を重視し、先生の授業には、シュン先生が若い先生が同席していました。今でも印象的なのは、「食道熱傷」の授業で、「口に入れて熱いだから、吐き出せば良いのに、飲み込むから熱傷が起る」というように日常生活の体験と重ねたわかりやすい講義で、笑いの中で楽しく学んだ事です。

一九六二年、今から五二年前のシュン先生の内科外科看護法の講義録が手元にあります。その理由は、参考書も少ない時代の教科書として指定された「高等看護学講座」・通称赤本(註二)の内容はシュン先生の講義内容と異なり、先生

独自の教授案によるものであったので、ノートはテキストに等しかったからです。

この時代の看護教育は、例えば「結核と看護」という講義で結核病棟の婦長さんがテキスト・赤本を使って、読み、経験を語るというような講義が多かったのです。シュン先生の講義は斬新的で、初回の総論は病気・症状等を、続いて病気を病名ではなく、急性(acute)突然激しい症状で起こる)・慢性(chronic)障害が長期に渡る)・ターミナル(terminal stage)終末期。限られた命を生きる)とついで一連の流れとして理解することを促し、そして病むことによって、身体的、精神的、情緒的、社会的、経済的、公衆衛生的な面にどのような問題が起こるかを考える事。「肉体的な苦しみは、精神面にも影響を及ぼし、性別年齢にかかわらず不安を持ち、行動上にも変化が生じる」と統合体としての人間の見方を強調しています。自己学習・予習、復習の重要性や小テストをする事も書かれています。

「内科的な治療(主に薬物療法)・外科的な治療(手術・悪い部分を切除する治療)は、治療方法の違いに過ぎない」と別々に教えるのではなく統合的な考え方を教え、このことによつて応用力、自ら考える力を身につけたと思います。各論では、基本となる知識として「水と電解質」を教えています。当時の看護教育では、革新的な内容だったのです。体液のバランス維持に影響を受けやすい小児・老人という対象の特徴にもふれ、脱水の項では、その分類や酸塩基平衡、単位ミリ当量ミリオールの考え方、これらを根拠に看護の原則を教えています。このような教育を看護教員が行ったのは日本でシュン先生が最初だったと思います。また、当時看護教育では教えていない老年学にもふれ、老人は六五歳ではなく七〇歳からとし、個人差が大きい、と現在では当然なことを五〇年前に教えています。今思うと、発想が創造的で、この水源は、常に文献を調べ特に外国の文献から知見を得ていたことがうかがえます。日本医師会雑誌に掲載された文献を引用し、加齢のプロセス(agling process)など当時は最も新しい考え方、見方も教育する努力家でした。講義

には英語が多く使われました。

赤本といわれた当時の教科書には、どのような病気でも看護は、「安静療法」「食事療法」「薬物療法」と書かれていた時代に、先生は、定義・概念(言葉の意味・内容)、機序・メカニズム(なぜこのような事が起こるのか)・根拠(だから、「このような看護」が導かれる)と看護の本質や共通性を強調しました。常にこうした論理で教授内容が構成され、教育が行われ、訓練ではなく、本質を理解し自分で考え、行動出来る人の育成・教育が重視されていたのです。このような考え方・教育は今でも聖路加の看護に受け継がれているのです。

歩みからもわかるように、シュン先生の原点は、臨床での看護実践、大使館等でのプライベートナース(一人の方を二四時間自宅でも看護をする)、看護管理の経験、語学力、なかでもフィリピンの日本病院と敗戦後の捕虜収容所における看護の経験でした。収容所では、やせ細り、腹水で苦しむ患者さんへの心身の看護、また、アメリカ軍の治験的管理下におかれた彼らのバイタルサインや全身観察・検査等も専門的な知識に基づき判断が求められる看護の重要な役割であったと語っていました。それゆえ、常に外国の文献を調べる事、臨床の現場とのつながりを大切にしています。これらの経験が、看護教育へと活かされてゆくのは、ウエイン大学への留学でミス・ビーランド教授(Irene L. Beland) への学びです。

Irene L. Beland : CLINICAL NURSING Pathophysiological and Psychosocial Approaches. The Macmillan Co. (一九六五年初版) を読むと、講義の順序は異なっていますが、シュン先生は後年までの本の教育内容に大きく影響を受けていることが分かります。先生は、ミス・ビーランドのこの本を宝物のようにとっても大切にしています。(初版本刊行年を見ると、先生の帰国一六年后に出版)

先生は、留学中に学んだ事を帰国後、すぐに教育に活かしています。が、その内容や教育方法は、借り物ではなくご自分のそれまでの体験に裏付けられていました。例えば、浮腫のある患者さんのケアは「水は、高さより低きに流れる。だから、浮腫のある部位は高く保つ」「腹水があると横隔膜を挙上し、呼吸・換気の働きを妨げる。だから、上体を少し高く保つ」「浮腫のある皮膚は、表皮が薄く、皮脂膜も少なく傷つきやすい。だから、皮膚を保護する。皮膚を保護するのは、皮脂膜。」「皮膚の汚れは、油で制する。」「これはつまじいという食べ物、アミノ酸・タンパク質を多く含む」というように、わかりやすい印象的な言葉で看護に応用する原理を教えました。このような例は栄養失調で苦しむ日本兵の看護やフィリピンの中を逃亡する中で食べた「様々な動物の味」の体験が含まれています。

患者さんの模擬も上手で、圧巻は、パーキンソン病の患者さんを演じる時でした。患者さんの特有な歩き方・背中を丸めトットと小刻みに歩く、ピルローリング・五本の指先で丸い薬を作るように常に手を動かす様子を授業中に演じるのです。ですから私達は、すぐにパーキンソン病を理解しました。お父さんがパーキンソン病だったことも、後に分かりました。授業中に良く学生に質問をし、答えられないと厳しく対応をする先生で、授業に情熱を注いでいました。

理論と看護実践との統合 看護師としての優れたモデルを看護実践の中で

一年生のキャッピング前から病棟実習がありました。毎日そして土曜日も朝六時四十分からの礼拝の後、七時から九時迄病棟で実習を行っていました。最初は、一人の患者さんのケア、二年生になると二人の患者さんのモーニングケア・洗面・ベットメイキング・全身清拭・食事への援助を行い、看護記録の記載、ナースへの報告を終えて、講義に出席しました。看護における日常生活への支援（療養上の世話 註三）の意義、重要性を痛いほど実感した教育でした。反面

労働力として期待されていた時代でもあったのです。

この毎朝の実習とは別に、内科病棟、外科病棟、手術室、栄養調理室等、週単位の实習がありました。臨地実習指導者は、主として若い助手の先生と病棟のナースで、シユン先生も病棟に来ますが巡回して様子を見る程度で、実習の場で学生に指導することはあまりありませんでした。

二年生の調理室実習では、糖尿病や腎臓病患者さんの治療食の献立をつくり、調理をするという実習が行われました。学生もその食事を食べます。透析がなかった時代、二年生が受け持っていた腎不全の患者さんが、「食欲がないので工夫してほしい」と栄養士に依頼がありました。一日の必要エネルギーを満たし、タンパク質制限、低カリウム食という条件の中で、食事の献立と調理を二年生に任されたのです。私達は、いろいろと調べたのですが、食品に含まれているカリウム量を記載した文献がなく、慶應義塾大学の図書館にあることを見いだし、調べに行きました。そして、患者さんに何を食べたいかを訊き、「お団子」という希望を受け入れ、体重に応じたタンパク質量と食品に含まれるカリウム量を計算し、低カリウム食、必要エネルギーを満たす献立をつくり、調理をし、ベットサイドに届けたのです。

患者さんは、食欲はないのですが、受け持ちの三年生、調理室実習の二年生の思いと努力に感激をし、食べて下さったのです。この体験は、大きな感動・看護する事の喜び、すばらしさを実感した出来事でした。

その後、この事を学内で研究発表をする事になり、上級生がこの患者さんの看護について事例報告をし、二年生の五人の栄養実習室グループは、食事療法の実際を全校生の前で発表しました。さらに、これらのことをまとめ、シユン先生が書かれた「腎疾患患者の看護（医学書院）」に載りました。そのご褒美に大きな柿をいただいたことを覚えています。忘れられない体験は、全身浮腫のネフローゼ症候群の男性患者さんの看護です。シユン先生は「なぜ、浮腫が起こつ

たのか」「アルブミン値は?」「看護で大切な事は?」というように矢継ぎ早に質問をします。そして、一緒にケアをしましょうと、ベットバス(全身清拭)をする事になりました。ウォーマー(warmer 註四)で暖められた二枚の綿毛布の間に裸になって横たわってもらい、途切れない会話の中で手際よくベットバスを進めてゆくのですね。看護で困っていたのは、両下肢の浮腫そして浮腫で大きくなった陰囊のケアでした。先生は、傷つきやすいからとオリブオイルを含ませた脱脂綿で柔らかかに拭いてゆきます。そして「苦しいでしょう?」と患者さんに語りかけるのです。「むくみで重くなっているから、重力で引つ張られるのよね」とフェイスタオル(註五)で陰囊を持ち上げ、両大腿にタオルを渡し、うまく固定するという工夫です。患者さんは「とても楽です」と答えたのを覚えています。先生の指先、特に親指は丸く大きく柔らかくマッサージがとても上手でした。当時、マッサージのクラスもありました。臀部から肩に向かって大きなストローク(stroke 動作・動き)で背中をマッサージすると、患者さんのため息をもらいました。看護はこのような心地よさも大切なのだと、体験の中で気づかせるという教育でした。この行為には、血流やリンパの流れを促す、また、皮膚への刺激、皮膚の保護という意味もあることをも説明し、「一つの行為には多くの意味がある」と強調しました。

先生は、看護実践の中で多くの工夫をしました。看護は、創意工夫が大切だと学んだのも先生からです。シーツを担架にしてそのまま入浴をさせたり、食欲がない患者さんに「お茶漬け」を作り、飲み込んで良いですからと強気に勧めたり。学生も、調理室から海苔をもらい病棟のキッチンで一口おむすびを作ったり、自由に実習・看護をしました。

自由で、楽しかったのは、三年次の「ケーススタディ」でした。一人の患者さんを長期間受け持ち、主治医、インターン(現在の研修医)とも話し合い、責任をもって看護を行い、レポートをまとめるのです。卒業論文のような事例研究立でした。日本中の看護に従事する方々の考え方に大きな影響を与えたのです。

これらの先生の臨床看護のエッセンスは、私達が受けた講義内容のように一九六二年に出版した「内科的諸問題をもった患者の看護(メチカルフレンド社)」にそのまま生きています(註六)。科学的根拠に基づいた新たな臨床看護学の確立でした。日本中の看護に従事する方々の考え方に大きな影響を与えたのです。

おしゃれで、キューターな「おシユン先生」

最後に、多くの学生に愛されたおシユン先生の人柄を伝えるエピソードを綴ります。

シユン先生は、ユニフォーム姿がとても素敵でアメリカで求めたスタンドカラーで前立てにタックをとった、ワンピースを思わせるユニフォームを何着もお持ちでした。口紅は深紅で、私服は明るい赤やピンク、グリーンが多かったように思います。

卒業後、遊びに伺った時、大学寮内にある先生の住まいには、沢山の緑がありました。毎年友人のポール・ラッシュさん(註七)から贈られるポインセチアは大きく育ち、また、水栽培の中で、セントポーリアの子供達が沢山小さな芽を出していました。先生は、根が出る植物は何でも水栽培で育て、増やす事を楽しんでいました。料理も上手で先生が作ったガーリックトーストの味を今でも覚えています。看護のみならず家事にも長けた先生は、いつも白馬に乗った王子様が迎えに来るとも語りました。

私は一九七一年から、先生の下で教育に従事しました。先生の看護の考え方は変わりなく、時折実習の場にも出ていましたが、文部省や厚生省の仕事が忙しく若い教員達に多くを任せていました。先生は常に「和」を大切にし、それが神様から賜をいただいている、同じ枝につながる、多くいても一つのからだ（註八）というクリスチャンとしての信念を実行していました。ですから、私達は、対等な関係で信頼し合い、討議が出来ました。

日野原重明学長の下、「看護教育は看護教員が行う」という両先生の考えで、例えば、「循環器系疾患」と「看護」を、医師と看護教員が互々に教えるのではなく、統合し、看護教員が教えていました。まさに、先生がウエイン大学留学で学んだことが生き続けており、さらに進化したのです。新しい教育の試みも「教育は、試行錯誤が許される。私が責任をとりますから、試みなさい」と若い教員を支えました。聖路加国際大学の教育には、こうした環境の下で、常に看護界のリーダーの育成をめざし、「最善の、最新の教育」をするという文化が受け継がれています。

シュン先生は、看護界に限らず内外の友人が多く、友人を大切にしていました。熱心なクリスチャンで、チャペルの委員も務め、学生が洗礼を受ける時の「洗礼名の名親」にもなっています。

何事も、常に、努力を続ける先生でした。そして、晩年になっても、白馬に乗った王子様は先生の年齢に応じて年老いて「きっと今頃入れ歯が、ガクガクしているわよ」とその様子を演じるユーモアも失いませんでした。

シュン先生は、まさに日本の臨床看護学確立に貢献した第一人者です。先生の歩みは、看護を愛し、看護のすばらしさを実践と教育とを一体化する中で伝えて下さいました。日本の看護界のリーダー達に大きな影響を与えたお一人です。シュン先生が看護教育の指導者として熟練の域にあった頃、その教えを受け、大きく影響を受けた一人の学生から見た先生、そしてその後上司として尊敬した、同僚の一人としてのシュン先生の思い出を綴りました。

註

- (一) 丸川和子・植田まさ・私の症例研究「看護」一九五〇年 二巻二一号 六〇頁
- (二) この時代のテキストであった「高等看護学講座」は、深紅のハードカバーで、通称「赤本」と呼ばれた。（現在の系統看護学講座 医学書院発行）
- (三) 保健師助産師看護師法の第五条に、「看護師とは、厚生労働大臣の免許を受けて、傷病者若しくはじよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする者をいう」と看護師の身分と業務を定めている。看護教育では、この国家試験受験資格を得る。
- (四) ウォーマー (warmer) 覆具保温器。常に綿毛布や手術着などの覆具を温めておき、必要な時には暖かな覆具を使った。現在も聖路加国際病院では標準的な装備である。
- (五) フェイスタオル 長いタオルのこと。ウオッシュクロスとフェイスタオル、そしてバスタオルが全ての患者さんのものに備えられていた。
- (六) 高橋シュン著「内科的外科的問題をもった患者の看護、メヂカルフレンド社、一九六七年初版（定価三〇〇円）一九九〇年絶版 一二七ページのこの本は、初版から四三刷、合計七万一千冊が販売された。（販売部数はメヂカルフレンド社営業部調べ）
- (七) ポール・ラッシュ（一九七〇～一九七九） 米国インディアナ州生まれ。一九二五年（大正一四）来日。立教大学教授。一九三八年、八ヶ岳山麓に清泉寮を建設。戦後も継続して清里の農村教育実験センター事業に携わり、シュン先生も公衆衛生看護の面でその活動を支えた。

(八)

わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。(ヨハネの福音書 一五章五節) 聖路加国際大学図書館入口の欄間ガラスには、葡萄の模様がある。



看護教育発展への取り組みーオープンマインドのリーダー

近藤 潤子

カリキュラムと公開講座

一九七二年（昭和四七）私は聖路加看護大学に母性看護・助産の教授として奉職することになりました。聖路加以外の卒業生が教授として採用されるのは初めてであるとのこと、いささか緊張している私を成人看護学教授の高橋先生は温かくサポートしてくださいました。大学になって八年を経過した時期で、前田学部長・檜垣教務部長のもと助教・講師・助手は若い卒業生の方々に占められていました。私の半年後に常葉先生が小児看護学に赴任されました。教員の皆様は聖路加が看護界のリーダーシップを取らなければならないという強い使命感に燃えているように思われました。

看護科目の教員全員で担当している教科の内容の整合性を図り、重複や欠落の有無を検討する作業を提案したところ、看護教育に造詣の深い高橋先生は大いに賛成され、早速調整してくださいました。これには前田先生、檜垣先生のような大きい先生も熱心に参加され、看護学原理・成人・母性・小児・公衆衛生看護の諸科目間の調整が図られ、それをもとにそれぞれの学科の学習目標、学習活動をしめす学習要綱が作成されていきました。

あれから四〇年の今日、大学改革の波に乗ってカリキュラムマップなどが提唱されています。そのような名称は用い



アリス C. セントジョン追悼礼拝で参列した旧友ポール・ラッシュの車いすを押す高橋先生 (1975年)



自身が立ち上げた公開講座に、退官後も招待されていた 中央が高橋先生 (1986年)

ませんでした。高橋先生とともに四〇年前にその作業を進めていたのです。

現在、看護過程の展開は看護学の枠組みとして確実に位置づけられていますが、当時、ユラの看護計画を原著で取り上げ翻訳して取り組んだのは聖路加が日本で初めてでした。その後、日野原先生からPOSが紹介され、Gordon、NANDAなどが看護計画、看護診断として取り入れられる系統的アプローチへと発展していきました。高橋先生は以前から臨床看護の著書、看護教育に関する著書を翻訳していらっしやったので海外の新しい情報を日本に紹介される大きな役割を果たして来られました。Loretta Heidegger著『Teaching in Schools of Nursing』(Lippincott)は、その頃、アメリカの大学院で看護教育を学ぶ者には必読書でしたが、高橋先生はそれをいち早く翻訳、出版していらっしやったことを帰国後に知り先生の先見の明に感銘しました。優れた英語力をお持ちで海外情報に常に関心を示しておられましたから、その後の公開講座に海外の情報を取り入れること、その後の大学院に外国人教師を登用し教育内容を強化することに大きな力になりました。

看護師がより深い科学的根拠を持って看護にあたるようにと一九七一年に公開講座(急速に進展する科学技術に対応した看護の発展を図るために、卒業生のリフレッシュを意図した公開講座)が開講され、多くの参加者がありました。高橋先生はご専門の立場からVital Signs(一九七二年)、人間理解(一九七三年)、腎・尿路疾患(一九七三年)、看護計画は(一九七四〜五)、看護教育計画(一九七八年)の各講座に大きな役割を果たされました。

公開講座はこの後、アメリカから講師を招き看護教育評価(National League for Nurses一九七九年)、看護教育カリキュラム(Boston College一九七九年)、看護理論と教育・実践(Villa Maria College一九八一年)を取り上げ、海外の教育に関する実情的な情報ならびに看護理論の紹介に当たりました。これらのテーマは大学院修士課程の開設に



1975年学部長に就任 1977年卒業式で2列目中央に座る高橋先生



高橋先生は教育・研究環境整備にも務めた
1977年 図書館長を兼務して3年目、同窓会寄付によって竣工した新図書館で資料を読む
高橋先生

とって喫緊の課題であり、研究科長として高橋先生はこの計画を理解され、支えて成功に導かれました。公開講座はその後、海外の講師により役割理論、変化理論、システム理論と続き、日本の看護界に理論を紹介し、その利用と看護研究に関する先達の役割を果たしました。

国内研修生の受け入れ

一九七四年、文部省（現文部科学省）は、国立大学医学部附属看護学校を短期大学に改組するに先立って、教員の教授研究能力の向上を図ることを目的として聖路加看護大学に教員候補者を派遣することを決めました。文部省の委員などを務められた高橋先生を通しての計らいだったと思います。委託研修生のための規定を作成し、各専門分野の教員を一九八九年終了までに二七名受け入れました。高橋先生の分野が最も多くの研修生を受け入れられ、これらの研修生が後に、それぞれの分野で大きな力を発揮することになりました。

大学院開設の準備

一九五八年～一九六二年、私は米国の大学・大学院修士課程に在籍していましたが、その時にゴールドマーク報告（一九六三年）やブラウン報告（一九四八年）などでアメリカの看護教育について学びました。病院附属養成所が主体であった看護師養成について、E・L・ブラウンは、看護教育も他の専門職と同じように基礎教育は大学の学士課程にすべきであり、さらに大学院が必要であると説き、それにしたがって大学や大学院への転換が進行していました。また看護学部を持つ大学には学士を目指す養成所の卒業者のための編入学課程が独立したクラスとして設置されています

た。基礎看護学を看護学士課程で終了した後に臨床や教育に特化した修士課程が開設されていました。この制度で修士課程を修了した私は、日本でも、このような看護教育制度を実現すべきであると思っていました。聖路加看護大学にお招きいただいたときに前田、檜垣、高橋先生が、「いずれ大学院を開設したいと考えています」と言われたので、大学院の実現の可能性を期待して一九七二年四月、聖路加看護大学に奉職する決心をしました。

大学院修士課程について模索が始まったのはそれから二年ほど経過してからでした。文部省の委員を務められた高橋先生と一緒に文部省に出向き、看護学修士課程を開設したいと申し出ました。日本に前例のないことであり、応対された若い事務官の方は、当時の高校（准高）教員養成のために開設されていた国立大学の教育学部特設看護教員養成課程を想像されたようで、「看護単独で大学院を構成するだけの内容があるか。例えば大学院の教育学に組み合わせるような措置が必要ではないか」との質問がありました。私達は看護系大学院の必要性の説明に努めました。また設置基準に基づき、本部周辺の校地面積の不足が指摘されたりしました。何度か文部省に参上し高橋先生はその都度、熱心に説明に努められましたが、埒があきませんでした。

一九七六年、国際協力事業団（現国際協力機構 JICA）に本邦初の看護教育分野の国際協力としてエジプト・カイロ大学副総長から、WHOを通じてカイロ大学、アレキサンドリア大学に送られたアメリカ人の教授がそれぞれ両大学に看護学士課程、修士・博士課程を開設し終えて帰国してしまうので、それに匹敵する教授を日本から派遣して欲しいという要請がありました。調査団が構成され、私はこれに参加することになりましたが、これに文部省医学教育課看護専門官の梅本氏に同行していただきました。両大学の視察の結果は、建物、施設は恵まれているとは言い難いが看護学十課程、大学院修士・博士課程は確立されていました。

援助を要請している国にすでに看護学修士・博士課程が確立していたという帰国報告に衝撃を受けた文部省関係者は千葉大学に看護学修士課程を開設してしまいました。なかなか認可申請のプロセスが進まなかった聖路加看護大学大学院はその翌年開設の運びとなりました。さまざまな形で修士課程の準備を進めてくださった高橋先生が研究科長に就任され、修士課程院生の指導に当たられました。

その後も、高橋先生のリーダーシップの元、博士課程の準備も進められていきました。私が就任して半年後に常葉恵子先生（小児看護学担当）が、一九八一年に荒井蝶子先生（看護管理学担当）が着任されました。高橋先生が退官されてからも、一九八二年に南裕子先生（精神看護学担当）、一九八三年に小島操子先生（成人看護学担当）、一九八四年に飯田澄美子先生（地域看護学担当）、また一九八六年に W. Fontener 先生（看護学方法論担当）が着任されて、大学院での指導を見据えた教授陣が拡充され、一九八八年の大学院博士課程開設へと進んでいきました。

一方 JICA を通じたエジプトへの援助活動は、エジプト保健省看護教員研修センター支援プロジェクト、カイロ大学小児病院プロジェクト、カイロ大学看護学部プロジェクト、さらにそれらを拠点としたアフリカ看護リーダーシップトレーニングへと発展しました。私は主として国内から支援しましたが、これらの実施には、高橋先生と信仰の上で深く結ばれその精神を受け継いだ立山恭子さん、野田洋子さんが献身的に支援活動をしてくださいました。JICA の関係者の方々からキリスト教精神に裏付けられた献身的活動であると評価されましたが、その源は高橋先生のご薫陶によるものと思えました。続いて渡辺薫さん、小野正子さん等、聖路加の卒業生がこれに参加してくださいました。彼女達と高橋先生とは海外と国内に離れていても強い絆で結ばれているようでした。



学部長・研究科長を退官1年後に開催された「高橋シュン先生に感謝する会」で挨拶する
(1983年5月30日 於：帝国ホテル)

日本看護科学学会

一九七四年、日本の看護大学は、高知女子大学、東京大学医学部衛生看護学科、聖路加看護大学、名古屋保健衛生大学（現藤田学園）、琉球大学、二年後に千葉大学が加わり六大学となり、看護系大学協議会が構成されました。会合が聖路加看護大学の会議室で行われていました。この組織から、看護学の発展を目指し日本看護科学学会が生まれました。一九七五年、学部長に就任された高橋先生は必ずこれらの会合に出席されました。看護科学学会第一回学術集会では会長を務められましたが、全学あげてこれに参加しました。後に同会の名誉会員になられ学術集会や懇親会に出席されて後輩を励ましてくださいました。

この会合の会場となった聖路加の会議室には、高橋先生が丹精込めて育てられたセントポーリアがいつも美しく咲きほこり、集まった会員の関心を集めました。葉がしでどんどん増えていくセントポーリアのように会員が増し、会が発展するようにと、セントポーリアをデザインしたバッジが作られました。一九八一年に一八五名だった会員は六年後に五〇〇名を超えて日本学術会議の登録学会になり、三三年を経た現在七〇〇〇名の会員を擁する学会に発展しています。

高橋先生は、卓越した看護実践力を持ち、優れた教育者だったにもかかわらず、常に謙虚でした。若輩の私を受け入れ支援してくださったので、充実した日々を過ごすことができましたことを深く感謝しています。高橋先生の行動には、いつも深い信仰をお持ちであることがうかがわれ、未熟な自分を反省させられたいがしはばありました。

高橋先生は、ご自分を目立たせることなく、しかし大学になって間もない聖路加看護大学に大学院を開設し、次の躍進の土台を築かれました。そのご功績の大きさは計り知れないものがあります。



生涯を看護教育に捧げてー松江での日々

杉谷 藤子

二〇一三年、出雲大社では六〇年ぶりの平成大遷宮が行われています。出雲の地は古事記や日本書紀に綴られる神話の中心舞台でもあります。松江市は地方の静かな城下町であります。

広大な地、北海道で生まれられ、長年東京という大都会の看護界で活躍されてきた高橋シュン先生が、松江に移住して来られることは、驚きと感動をもって迎えられました。

島根大学教授でいらっしやる野津良夫先生の夫人米子様、高橋先生の妹様であり、その妹様が、お母様のお世話もなさっていたというご縁であると聞いています。

島根県看護協会としては、早速に一九八四年から、継続教育や臨床実習指導者研修での講師をお願いしています。「実習指導」「看護過程の展開」「看護論」などの科目の講義を一九八九年まで続けられています。また一九九〇年には、県看護協会としての第一回看護の日の記念講演（演題：社会に於ける看護の役割）をお願いしています。

その間、松江赤十字看護専門学校においても、学生を対象に特別講義（演題：病室における基本的ケアの重要性）を数回にわたり行っていただいています。

看護師や学生にお話しされた内容については、当時の教員たちも定かに全容を記憶していませんが、高橋先生の「正三角形を基盤に示された3S学」の教えは、私達の心にも残り、多くの後輩や学生に伝授されています。

野津教授宅を訪問され、直接高橋先生にインタビューされました坂口順治氏（当時平安女学院大学学長）の記録には次のようにあります。『スチュワードの教育哲学から、科学 (science)＝知識、技術 (skill)＝技能、精神 (spirit) の3つを辺とする。底辺に精神をおき、二辺が技術と科学で形成する正三角形のパラダイムで表され、さらにこの基本形から、高橋先生は次の四点を強調されている。

第一 看護は総合科学としての実践科学でありたい、The person a whole という人間理解

第二 看護教育は読書偏重ではなく「培う」こと、経験が最も大切な自己教育であり「命」を預かる看護の実習は人間関係の触れ合いによって感じ取る確かなコミュニケーションを体得していくところに焦点を合わせなければならぬ

第三 看護はケアの行為が媒介となって人間自身に変化をもたらす

第四 看護のマネジメントは人事管理に尽きる。病室の管理をしていると、人の欠点がまず目につくが良い点を見つける努力が必要

と説かれている』（聖公会新聞「二〇一三年五月」五〇号より）

この一文を改めて拝読し、高橋シュン先生の教育理念の真髄を見る思いをしています。

いまこの教えが受継がれているのかに、いささかの危惧もありますが、特に先生の恩恵を受けた島根県においては、この宝の贈りものを広く後輩に伝授し、ケアの上で実践してゆかねばならぬという思いを強くしています。



退官後、松江で妹家族と暮らす母親の元へ居を移し、その晩年をともに過ごして世話をした



松江では妹家族と暮らしながら、教え子や名づけ子と折々に会うことを楽しんでいた

島根県看護協会は、先生の県内看護界へのご功績に感謝し、名誉会員の称号を贈っています。

また、島根県では、一九九五年四月、出雲市に県立看護短期大学の創設をめざし、一九九三年四月から設立準備委員会を発足しました。幸いにもその委員として高橋先生に就任いただくことができました。先生が松江に住まっていたらならなければ、とても実現できなかったであろうと思っています。同じく委員となった私は、日本看護協会の常任理事を退任して間もない時で横浜に在住していました。月の半分を島根に出張し、開設準備に当たっておりましたが、先生から多くの助言をいただくことができました。先生には委員をお願いし、いずれ開設時には初代学長にと心密かに期待していました。県も「学長は必ずしも医師でなければならぬ」とは考えていない」との意向でした。

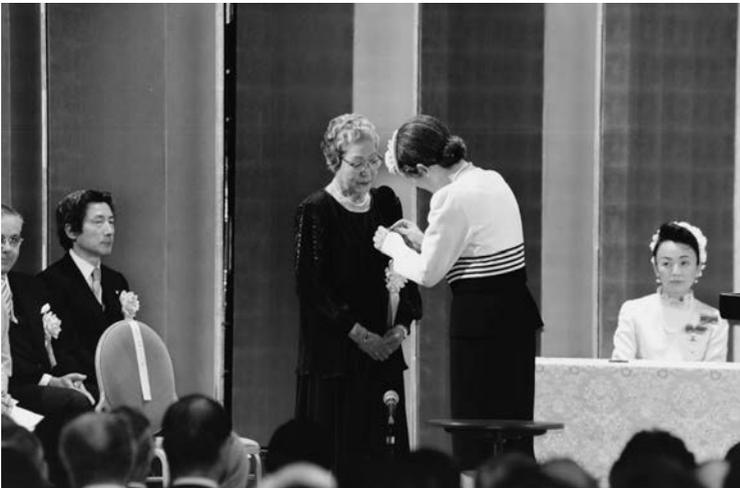
二年間の委員会での高橋先生の発言は、真に「大学教育とは如何にあるべきか」「看護教育に不可欠なものは何か」など、適確にかつ具体的に述べられていました。その看護教育に対する真摯な姿勢とあふれる情熱は、全委員にも伝わり、初代学長への期待は同じであったと思います。

しかし、最終的には、年齢が壁となり実現できませんでした。私達の大学化への働きかけが、もう少し早く功を奏していたらばと悔やまれました。しかし短大の創立後も、県の財政は厳しく、また教員の確保にも苦労する年月が続きました。ようやく二〇一二年四月県立大学看護学部として昇格が実現できました。この喜びをご生前の高橋先生にご報告できましたことが、せめてもの恩返しになったかと思っています。

先生の乃白町のお宅に、私も二、三度お訪ねしましたが、松江市の郊外で緑の多い静かな地域でした。松江赤十字病院看護副部長で後に県協会会長もなされ、先生と親しい付き合いをされた板橋和子氏は、庭には四季の草木や花が植えられ、小鳥のさえずりも聞かれ、「今朝鶯が鳴いていた」「田井がきてくれた」などと電話されることもあったそうです。



日本看護協会の創立40周年記念式に名誉会員として招待された 後列左から3番目が高橋先生（1987年5月）



ナイチンゲール記章授与式 皇后陛下に記章を授与され、お言葉をかけられる高橋先生（1997年7月）

そして、先生がナイチンゲール記章を受章されました時のことは、『学園ニュース』二二五号の中に詳しく述べられています。松江在住中のことでした。先生は「だれでも女性はこんな時、何を着るべきか（中略）気になることが増えてきた」と記されています。日赤本社からの情報を得て、松江で紺の服をさがしていらっやいます。そんな手助けや授与式出席の付添人の役割も、板橋氏がなさっています。「式典中、高橋先生のお姿は、優しく、美しく、堂々といらっやした」と感想を話されています。続いてスイスでの授与式にも出席されていますが、その間周囲の心配をよそに、すこぶる健康に過ごされたとのことでした。

その後、甥の方の帰郷を機に、ウエルライフガーデン松江に居を移されることになりました。その際多くの本も整理されるので、看護短大の方へ寄贈していただきました。ガーデンから、聖公会へ出かけられ、お仲間健康体操を指導されたり、赤十字病院への受診時には、看護部に立ち寄りながら、患者としての立場から、色々と感じられたことを話してください、とても役立つことが多かったようです。聖路加関係の方々との訪問もあり、私と一緒する機会もありました。或る日、ご夫妻で市内に泊まり乍ら、荷物の整理を手伝っていらっやる後輩の方と出会いました。荷物を少なくするため「これは捨てましょうか、と尋ねると、次々と思ひ出話しが始まって、それを聞いていると、大事にされてきた越し方が思われて、始末などでできませんね」と話されました。その時、私は本当に長い人生を、人との交わりを大切にされてきた先生の生きざまの一面を知らされた気がしました。

高橋先生と私の個人的付き合いは、横浜や出雲市と別々の地に住んでいたこともあり、長い期間ではありませんでした。島根県内の看護学校に勤めていた一〇年余、修学旅行での見学先は、東大標本室と聖路加国際病院と決めていました。

特に病院見学時、学生の質問に対して必ず「何故そのことを聞きたいのですか」と問われました。私は学生たちに「愚かな質問はしないで欲しい」「質問するときは、同時に理由も述べて欲しい」と求め、練習まで行って出発したものでした。それでも見学先を変えようとは少しも考えませんでした。

看護部長になってからは、看護の質の目標を大胆にも聖路加国際病院におき、例えば看護師の業務に占める『療養上の世話』と『診療補助』の割合が公表されていましたので、『聖路加国際病院での割合を追い越せ』とは最後まで申しませんでした。『追いつけ』と叫び続けていたように思います。

また、看護師中、師長、教員候補者を選び、各二年間ずつ派遣し、実務研修を依頼して参りました。これを受けて帰ってきた看護師たちは、その効果を期待以上に発揮しました。

このように、聖路加国際病院が、地方の施設の目標となり、期待し得る存在であったことは、総婦長(当時職名)様の力に拠るところも当然ながら、高橋先生を中心とした教育を受けた方たちによる実践の場が形成されてきたからだと思います。改めて先生がもたらされた教育の偉大さを痛感しています。

唯一、高橋先生が自宅を訪問下さったのは、私が看護短大を退任し、松江市内に住まいを新築して間もない頃でした。聖路加出身の井上幸子先生が来訪下さった折、高橋先生にもお会いになりたいとの事でお招きしました。家の中をぐるりとご覧になり、「寝室ですから」と戸を閉めていた部屋も「あらそううー」といい乍ら、ガラッと開け「あら広いわね、もう一台ベットが入るわね」と七〇歳になっている私をみてニッコリと笑われました。無邪気そうな顔をして、そして平素余り食べられないと聞きましたにぎり寿司を、「美味しい」と言ってお食べいただきました。このことはよい機会を得たと思ひ出されます。

二〇〇九年九月、高崎市の新生の園に移られるとの事で、今回島根県看護協会会長時代の資料を提供下さった松浦昌代氏、板橋氏、当時会長の住田佳子氏と共に別れに参り、ゆっくりと日野原先生のご健闘ぶりのことなどお話ししましたが、それがお会いした最後となりました。

新生の園からのお便りや、訪問された方々からのお話を聞きました。先生がお仲間の方々に見守られ、花々に囲まれる日々の終の栖でお過ごしになりましたのは、ご褒美の贈り物であらうと思います。

私たちのような地方の者にも、何の隔てもなくお付き合ひ下さいました。心の広い先生、厳しい一面ユーモアに満ちあふれた先生に、感謝を申し上げ、心からご冥福をお祈りしつつペンを書きます。

第三章
資料篇



高橋シュンが受章したナイチンゲール記章



文献一覧

高橋シユンの著作と、シユンに関する文献についての書誌情報を資料としてまとめた。なお、ここに挙げたのは以下から得た情報に限られる。

- 一、聖路加国際大学図書館の蔵書、二、最新看護索引Webの検索結果、三、「看護」総索引第一卷（一九四九）〜第三〇卷（一九七八年）掲載文献、四、「看護技術文献総索引」掲載文献（一九五四年〜一九七六年）、五、学内広報誌（学園ニュース、聖路加同窓会だより）

著書

- 高橋シユン（一九六〇）、内科的諸問題をもった患者の看護、メチカルフレンド新社
 高橋シユン（一九六七）、内科的諸問題をもった患者の看護（第二版）、メチカルフレンド社
 高橋シユン（一九六七）、外科的諸問題をもった患者の看護、メチカルフレンド社
 高橋シユン、小仲恵子（一九七四）、外科的諸問題をもった患者の看護（第新版）、メチカルフレンド社
 高橋シユン（一九七五）、内科的諸問題をもった患者の看護（第三版）、メチカルフレンド社
 高橋シユン（一九八七）、看護行為を支えるもの…看護の行為と看護の原理、を問います、日本看護協会出版会
 高橋シユン（一九八八）、第二次世界大戦前後の看護婦たち、日本看護歴史学会編、検証―戦後看護の五〇年、二一―八、メチカルフレンド社
 阿部正和、高橋シユン（一九六三）、腎臓病患者の看護…病態生理から生活指導まで、一巻、医学書院
 阿部正和、高橋シユン（一九六六）、肝臓・胆のう・膵臓疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、四巻、医学書院
 阿部正和、高橋シユン（一九六八）、泌尿器疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、一三巻、医学書院
 岡本重礼、高橋シユン（一九六八）、泌尿器疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、一三巻、医学書院

- 阿部正和、高橋シユン（一九六八）、腎臓病患者の看護…病態生理から生活指導まで、一巻（第一版六刷）、医学書院
 阿部正和、高橋シユン（一九七二）、肝臓・胆のう・膵臓疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、四巻（第二版）、医学書院
 岡本重礼、高橋シユン（一九七六）、泌尿器疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、一三巻（第二版）、医学書院

翻訳書

- Heidegerken Loretta E.（一九四六）、高橋シユン、訳（一九五二）、看護学校における学習指導…原理と方法、メチカルフレンド社
 Phipps Wilma J.（一九七九）、片田範子「ほか」訳、日本語版監修…高橋シユン訳（一九八三）、臨床看護学、医学書院

監修書

- 北原静夫他（一九六六）、アレルギー疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、三巻、医学書院
 日野志郎他（一九六六）、血液疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、五巻、医学書院
 五島雄一郎他（一九六七）、循環器疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、六巻、医学書院
 加藤格他（一九六七）、眼疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、一〇巻、医学書院
 和田正久他（一九六七）、内分泌・代謝疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、七巻、医学書院
 安芸基雄他（一九六七）、神経疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、八巻、医学書院
 小倉脩二他（一九六八）、耳鼻咽喉疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、一一巻、医学書院
 石田肇他（一九七二）、骨・関節疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、一五巻、医学書院
 日野志郎他（一九七二）、血液疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、一五巻、医学書院
 五島雄一郎他（一九七二）、循環器疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、六巻（第二版）、医学書院
 北原静夫他（一九七二）、アレルギー疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、三巻（第二版）、医学書院
 小倉脩二他（一九七六）、耳鼻咽喉疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、一一巻（第二版）、医学書院
 安芸基雄他（一九七七）、神経疾患患者の看護…病態生理から生活指導まで、八巻（第二版）、医学書院

雑誌論文

- 高橋シユン（一九四九）、内科的結核看護、看護一（五）、二八―三二、
 高橋シユン（一九五〇）、討議会（一）患者の精神的安静、看護二（六）、四八―四九、

高橋 シュン他 (一九五〇) 討論会 (二) 看護教育のあり方 看護 二 (六), 五〇一-五三。
 高橋 シュン他 (一九五〇) 総会討論会記録 患者の精神的安寧 看護 二 (七), 七三-八九。
 高橋 シュン (一九五二) 総合看護の意義 看護 三 (四), 六-七。
 高橋 シュン (一九五二) 看護婦として必要な知識 看護 三 (三), 二-九。
 高橋 シュン (一九五二) ユニホームの着方 看護 三 (九), 四一-四七。
 高橋 シュン (一九五三) 台湾のセミナルからワークシヨップのあり方と看護教育の中心問題 看護 五 (二), 一六-一九。
 高橋 シュン (一九五三) 台湾のセミナルから看護教育の中心問題 (二) 看護 五 (四), 二六-三〇。
 高橋 シュン (一九五四) 新春座談会 今後の看護教育は? 看護のBOOKS (一), 五-一一。
 高橋 シュン (一九五四) 慢性疾患看護 看護 六 (七), 一一-一九。
 高橋 シュン (一九五四) 看護の工夫 看護 六 (三), 四-一一。
 高橋 シュン (一九五七) 狭心症発作を起した患者の看護 看護 九 (六), 一七-二二。
 高橋 シュン (一九五七) 内科的諸問題をもつた患者の看護 昏睡状態にある患者の看護 看護 技術 三 (九), 二一八。
 高橋 シュン (一九五七) 内科的諸問題をもつた患者の看護 浮腫のある患者の看護 看護 技術 三 (二), 二一八。
 高橋 シュン (一九五七) 内科的諸問題をもつた患者の看護 黄疸のある患者の看護 看護 技術 四 (二), 二一八。
 高橋 シュン (一九五八) 内科的諸問題をもつた患者の看護 出血傾向のある患者の看護 看護 技術 四 (三), 五一-〇。
 高橋 シュン (一九五八) 内科的諸問題をもつた患者の看護 咯血・吐血・下血を起した時の患者の看護 看護 技術 四 (五), 五五-五九。
 高橋 シュン (一九五八) 患者を幸せにするには 臨床看護婦の立場から 看護 一〇 (六), 二六-二八。
 高橋 シュン (一九五八) 内科的諸問題をもつた患者の看護 高血圧を持った患者の看護 看護 技術 四 (七), 二一七。
 高橋 シュン (一九五八) 内科的諸問題をもつた患者の看護 咳と痰の多い患者の看護 看護 技術 四 (二), 一〇-一七。
 高橋 シュン (一九五九) 内科的諸問題をもつた患者の看護 有熱患者の看護 看護 技術 五 (二), 二二-二四。
 高橋 シュン (一九五九) 内科的諸問題をもつた患者の看護 運動麻痺のある患者の看護 看護 技術 五 (三), 一七-二二。
 高橋 シュン (一九五九) 内科的諸問題をもつた患者の看護 腹部膨満のある患者の看護 看護 技術 五 (七), 一三七-一四四。
 高橋 シュン (一九五九) 内科的諸問題をもつた患者の看護 頭痛を訴える患者の看護 看護 技術 五 (九), 一五一-一五五。
 高橋 シュン (一九五九) 内科的諸問題をもつた患者の看護 胸痛を訴える患者の看護 特に心臓痛のある患者 看護 技術 五 (二), 八二-八七。
 高橋 シュン (一九六〇) 看護問題の調査方法について学ばうのフロレンス・ナイチンゲール財団教育部主催のセミナーより 看護 一一 (八), 五一-六〇。
 高橋 シュン (一九六二) 看護症例研究例 看護技術 七 (六), 七-二七。

高橋 シュン (一九六二) 座談会/看護の基本となるもの 看護 一四 (四), 三〇-四四。
 高橋 シュン (一九六二) 頭痛を訴える人の看護 看護技術 八 (七), 一〇-一一。
 高橋 シュン (一九六二) 秋田市で開催の第一回看護研究会をふりかえって 看護技術 八 (二), 八〇-八七。
 高橋 シュン (一九六四) 三九年度総会に出席して「私の意見」 看護技術 一〇 (七), 六八-六九。
 高橋 シュン (一九六五) 教師は何をなすべきか 文部省教育課程改善案に思う 看護 一七 (二), 二〇-二三。
 高橋 シュン (一九六六) ナーシング・ケアスタディについて 看護教育研究会シンポジウムより そのII 看護技術 二二 (二), 一一九-一二二。
 高橋 シュン (一九六七) 感染防止のための皮膚の保護 看護技術 二三 (二), 二二-二八。
 高橋 シュン (一九六八) 看護計画 看護技術 一四 (一〇), 九-一五。
 高橋 シュン (一九六九) 座談会/看護の技術をたかめるもの その方法と実践 看護 二二 (四), 一〇-二三。
 高橋 シュン (一九七四) 成人看護における病棟演習についての考察 聖路加看護大学紀要 (二), 六五-八〇。
 高橋 シュン (一九七六) バイタルサイン 臨床における諸問題と現任教員への提案 看護技術 二二 (二), 五九-六八。
 高橋 シュン他 (一九七八) 成人看護学におけるインテグレーションユニットの試みについて 聖路加看護大学紀要 (五), 二八-三七。
 高橋 シュン他 (一九七九) 成人看護における診療と看護技術の学内演習の試み 聖路加看護大学紀要 (六), 二二-三〇。
 高橋 シュン他 (一九八二) 「実習ノート作成の手引」の改訂を試みて 看護過程をより流動的に理解させるために 聖路加看護大学紀要 (八), 二九-三八。
 高橋 シュン (一九八二) 第二回日本看護科学学会 会長講演 戦後における看護教育の変遷 (会議録) 日本看護科学会誌 二 (二), 二-三。
 高橋 シュン (一九八三) 会長講演 戦後における看護教育の変遷 日本看護科学会誌 三 (一), 二-九。
 高橋 シュン (一九八五) 臨床指導を考える 看護教育 二六 (二), 七-一八。
 高橋 シュン (一九八七) 主体性を尊重する看護【特集】第一八回日本看護学会シンポジウム・特別講演特集 (一) 成人看護 (和歌山) 看護 三九 (三), 二-四。

対談・コラム・自伝

高橋 シュン (一九四九) アメリカ便り 看護婦協会の皆様へ 看護 一 (二), 五-四。
 高橋 シュン (一九四九) デトロイトのこと 看護 一 (三), 四-六。
 高橋 シュン (一九五四) 埠頭の看護婦(フロレンス・M・ジョーンズさん)を偲んで 看護 六 (二), 四-六。
 高橋 シュン (一九六三) 看護技術百号によせて 看護技術 九 (三), 六-四。

高橋 シュン (一九七六) 書評/病態生理 看護 二八 (六) 九六
 高橋 シュン (一九九二) Nさんと2人の妻 思い出すけっち あの人 あの時 あ言葉二六 高橋 シュン 看護学雑誌 五五 (二) 一六八-一六九
 高橋 シュン 川島 みどり (一九九三) 生きた看護教育は実践の喜びの中で 看護実践の科学 一八 (二) 四二-五二
 (一九九七) 看護学雑誌 創刊五〇周年記念 座談会 看護の五〇年を振り返る (一) 金子光 川島みどり (司会) 高橋 シュン 週刊医学界新聞 (二二七) 一-三
 (一九九六) 看護学雑誌 創刊五〇周年記念 座談会 看護の五〇年を振り返る (二) 川島みどり (司会) 金子光 高橋 シュン 週刊医学界新聞 (二二〇) 二-四
 (一九九七) 看護学雑誌 創刊五〇周年記念 座談会 看護の五〇年を振り返る (三) 金子光 川島みどり (司会) 高橋 シュン 週刊医学界新聞 (二二五) 二-三
 高橋 シュン 佐藤 信也 (一九九八) 『看護』創刊五〇周年記念企画編集長インタビュー看護の贈与 (二) 人間を変化させる看護 高橋 シュンさん 看護 五〇 (二五) 三八-四三
 高橋 シュン (二〇〇一) 私が経験から学んだことそして後輩に託したいこと 看護教育 四一 (二) 一三四-一三六
 高橋 シュン他 (二〇〇五) マニマから東京看護教育模範学院まで 厚生省看護課長時代 日本看護歴史学会第一八回大会 交流セッション 戦中・戦後の体験を語る 日本看護歴史学会誌 (一八) 一四-三四

シュンの紹介・インタビュー

(一九七七) 『人物ロングラン』暮しの手帖 (四九) 六六
 高橋 シュン 勝原 裕美子 (一九九五) 私と看護の歩んできた道 高橋 シュン 先生に聞く 看護教育 三六 (六) 四九八-五〇四
 立山 恭子 (一九九七) 理論と実践の統合に力を注いだ高橋 シュンの歩んできたみち 『特集』副特集 ナイチンゲール記事受賞 看護教育 三八 (二) 九八-九九六
 坂口 順治 (一九九九) 高橋 シュンの看護学へのあくなき闘い 語り継がれる看護 『四季・初夏編』 婦長主任新事情 四 (七七) 八四-八九
 川嶋 みどり (二〇一四) 真のロールモデル 高橋 シュン 先生との出会い 看護展望 三九 (二) 八四-八七

学内広報誌

高橋 シュン (一九七二) 専門職としての看護の確立を―第二回看護研究会に出席して― 学園ニュース (三) 三
 高橋 シュン (一九七三) 臨床看護教育セミナー そのあゆみと抱負 学園ニュース (一三) 一
 高橋 シュン (一九七五) 学部長に就任して 学園ニュース (三〇) 二
 高橋 シュン (一九七六) 年頭所感 学園ニュース (三七) 二
 高橋 シュン (一九七六) カリキュラムの刷新と成人看護学 学園ニュース (四三) 一
 高橋 シュン (一九七六) アメリカ力の看護教育視察を終えて (一) 学園ニュース (四七) 二
 高橋 シュン (一九七七) アメリカ力の看護教育視察を終えて (二) 学園ニュース (四八) 一-二
 高橋 シュン (一九七七) ICN大会を終えて 学園ニュース (五三) 一
 高橋 シュン (一九七八) 巣立ちゆく人々に 学園ニュース (六〇) 二
 高橋 シュン (一九七八) 本学における教育理念と目標の設定について 学園ニュース (六二) 一-二
 高橋 シュン (一九七九) ミセス・セントジョン記念日に寄せて 学園ニュース (六八) 一
 高橋 シュン (一九七九) 聖路加看護大学の近況 聖路加同窓会だより (五三) 二
 高橋 シュン (一九八〇) 大学院研究科が発足に至るまで 学園ニュース (七七) 一
 高橋 シュン (一九八〇) 聖路加看護大学の近況 聖路加同窓会だより (五六) 三
 高橋 シュン (一九八二) 八一年の年頭に当って 学園ニュース (八三) 一
 高橋 シュン (一九八二) 新年を迎えて思ったこと 学園ニュース (九二) 一
 高橋 シュン (一九八二) ごあいさつ 学園ニュース (九四) 七
 高橋 シュン (一九八三) 学びの庭を去るに当って 学園ニュース (一〇二) 四-五
 高橋 シュン (一九八四) アリスの家の由来 聖路加同窓会だより (六八) 六
 高橋 シュン (一九八五) 開学二〇周年に思う 学園ニュース (開学満二〇周年記念特集号) 二
 高橋 シュン (一九九〇) 創立七〇周年記念特集号に寄せて―思い出のあれこれ― 学園ニュース (創立七〇周年記念号) 三
 高橋 シュン (一九九七) フローレンス・ナイチンゲールの記章を授賞して 学園ニュース (二五) 一
 高橋 シュン (一九九七) 私の歩んだ看護の道 一九九七年六月八日 聖路加同窓会講演 聖路加同窓会だより (一〇) 三-七
 高橋 シュン (二〇〇〇) フローレンス・ナイチンゲールの記章を授賞して 聖路加同窓会だより (二〇) 一-二
 高橋 シュン (二〇〇〇) 学部八〇周年に寄せて―礎を築いた思い出― 学園ニュース (二四三) 四
 高橋 シュン (二〇〇一) セントジョン先生の思い出 学園ニュース (二四七) 七



紹介記事転載

学部長時代、雑誌「暮しの手帖」の連載記事「人物ロングラン」の取材を受けた。その本文と写真を、同誌の許可を得て転載する。(原文ママ)

暮しの手帖 四九号（一九七七） 六六頁

「人物ロングラン」

ひとつのことを十年何十年、やり通してきてこれからもやり通そうとしている人たちの、人には見えぬ、その胸の底に流れるもののきびしさとしたかさ。そして、なんという、おおらかな若さ。

高橋俊さん 聖路加看護大学学部長

姿勢のよい人である。姿勢を正しく、上手に歩くと疲れない、これは看護婦にとって大事なことで、学生時代にきつく訓練されたという。

昭和七年、高橋さんが聖路加女子専門学校（現聖路加看護大学）へ入学したときは、看護の専門学校はここだけで、教育はきびしかった。高橋さんといっしょに二十四名が入ったが、三年後に卒業したのは一〇名だった。



掲載写真

戦争中はフィリピンへ派遣され、終戦をジャングルで知った。その頃の話は、いまだに話す気になれないという。二二年冬に引揚げ、二三年デトロイトのウエーン大学へ留学、戦後の混乱期で南方ボケの残っている身に、英語での大学授業は、精神的に辛かった。

北海道の深川から三日二晩かけて、東京の女学校へ、ひとり受検に来たときピラトリのアイヌ村の牧師だった父は、ひとりで行けないなら、東京で勉強する必要はない、といった。そんなしつけが高橋さんには一本の背骨としておっている。

帰国してから看護を教えて、五〇年からは学部長になった。タンカで運ばれてきた重態の患者さんが、歩いて退院してゆく、その間の苦しみと、そして喜びをともにできる、しかも学問の裏づけもいる、こんな仕事はそうない。結婚と仕事を天秤にかけたが、仕事をとって、独身である。



講演録・執筆原稿抜粋

高橋シユンの講演および本人執筆の文章を転載する。(全て原文ママ)

聖路加同窓会だより 第二〇二号(一九九七年 一月三〇日)

「私の歩んだ看護の道」 一九九七年六月八日 同窓会総会議演

みなさん、こんにちは。昨年の創立記念日の時に旧館でお話しさせていただき、そして同窓会でもお話が出来るという事は、本当にワンダフルです。どうも。光栄と存じます。ですけれども、八三歳にもなりますと、うまく話せませんので、まとまらない面白くもない話になりますが、五〇分どうぞ我慢して聞いて下さい。ごめんなさい。

先ず、簡単に私の略歴をお話ししますと、大正三年生まれ、北海道で育ち小学校を卒業して、満一三歳になったかならない時に一人で東京に出て香蘭女学校の試験を受けて入りました。五年制の英国ミッシヨンの女学校で、五年のとき英国人の副校長に呼ばれて、看護の学校に入ることをすすめられて、この学校に入りました。



昭和一〇年に卒業いたしました。卒業後すぐに聖路加国際病院に雇っていただき、それから一四年余り臨床の場で働きました。そして、五、六年してスーパーバイザーになりました。スーパーバイザーになった時は、アメリカのスーパーバイザーがおられて、スーパーバイザーミーティングというのに一回くらい出たおぼえがあります。それからナイトスーパーバイザーを、一八ヶ月いたしました。

それでちょっと結核になりました、小布施に三ヶ月入院いたしました。三ヶ月後にはすっかり影がきれいになって、これは結核ではなかったと、橋本先生が診断されました。それは多分アテビカルニューモニーの影であったらうという感じがいます。

そんなことで、仕事にもどりました。

昭和一八年から二二年までマニラ市にあるミッシヨンの病院に他の六名とともに派遣されました。戦争で日本がまだ負けるなんて思っていなかったんです。

その時に聖路加国際病院も大東亜中央病院と名称が変わっていったんです。

マニラは、歩いただけでも足の裏が焼けるような暑いところですよ。ですけど夜などは、日本が燈火管制の時に行ったものですから、夜の明るいこと、そんな感じをしておりました。

一年位、普通に働きました。

あちらの聖路加の看護学校、ただひとつ戦争中続けられたというのは、今日も御出席されている滝澤楢子先生が英語がお出来になりましたものですから、たったひとつだけ学校が存続出来たのです。あとは全部クローズしたんです。それで一年は無事にすぎ、二回目のクリスマスはかろうじて聖餐式を受けることが出来ました。

そして、その翌日マニラを脱出せよという命令がありました。

私共日本人は、どうしてマニラから出てしまわなければいけなかったかといいますと、日本人がいない方がより安全であるという院長の思いやりです。私共がそこを去った方が、残るフィリピンの医者、看護婦その他のスタッフの方たちに害が少ないだろうという事だったそうです。

そうゆうことで私たちが出て行ったわけです。はじめは堂々と自動車で、北へ向かって逃げたんですけども、ガソリンはなくなる、空襲はひどくなるので車を乗り捨てて、トラックにも乗りました。それもダメ。今度は徒歩、トボトボと暑いフィリピンの山を北へ北へと向かって、どこへ行くのもわからないし、北の方へ行くんです。

私たちは一時状況が良くなったら帰って来るつもりですから、そんなに必要なものを持って出ないんですよ。それで私なんかリュックサックなんかありませんから、ベッドのスプレッドをいつかは使えるだろうというので切らないで、折って四隅を縫って、そして肩にかけるところだけをつけて、そこに下着だの当座の使うものを入れて、靴を六足持って出たんです。靴は大切に思っていて、途中でその靴は全部腐ってしまっただけでした。雨期で靴の縫ったところが腐っちゃったんです。そういう靴をはいていきますと、靴底がはがれるとそこへ小石が入って痛いんです。だからそれを捨てちゃって、ハダシで歩いたんです。そういう生活が八ヶ月続きました。

そしてはじめはマニラを出てからシラノ、サンホセ、バヨンボン、ターマスクール、なんとかキャンガンと、ずっと台湾に近くなるようなところまで山岳地帯を逃げて歩いたんです。ようやくキャンガンのヒルが谷に来ましたが、ヒルがたくさん落ちてくるんです。私たちの皮膚の出ているところどころに止まって血を吸ってポロツと落ちて、ヒルは口の中に血液をとかすものもっていますから、タラタラタラタラどこへでも流れてくるんです。

終戦を耳にいたしましたのは八月一六日。よかったんだか、わるかったんだか、はじめて日本は負けましたでしょう。今まで負けたことがないんですから。

ですから本当に悲しい思いと、いや、いや、こんな生活はもうたくさん、済んでよかった。大喜びしたり、泣いたり、みんなでたいへんでした。

そんな生活から、また今度は別の問題がおきました。といいますのは、終戦が聴こえたんですけども、日本の兵隊は先に山を下りてしまいました。私たちは山へ追われたイグロット族の、小さな小屋を使っていましたから、住民がとんに帰って来るわけです。そして私たちに害を与えたり、ある人は殺されました。そんな状態で我慢しながら、長いことそれでも三〜四週間ぐらいそんな生活をしていたんです。

それでいよいよ山を下りて、降参しなくてはならない。降参する相手はそれが一八歳〜一九歳の、まるであどけない顔をしたアメリカボーイの兵隊の前で降参するんですよ。

そして捕虜になって収容所に入れられたのです。収容所に入りましたらありがたいことに聖路加の卒業生は全部手術

場の配属になったんです。私は内科系ですから手を洗ったり器械を出したり出来ませんから、中央材料室へ入りました。そしてそのアメリカの衛生兵の長が「ミス・タカハシ、あなたたちみんなナースは将校だ。私は兵隊だからあなたは主任になって私にオーダーして下さい。私は一生懸命働きますから」ってそんなことまで言われたんです。私共は、とても大切にさせていただきました。

またいい仕事もしました。助産婦が一人おりまして、逃げ歩いた女性の中でお産があつたんです。普通はダメになっちゃうんですけど。米軍の兵站病院といったら前戦からすべうしるです。その兵粘病院には医者も衛生兵も看護婦もいません。私たちだけなんです。そこでお産があるということ、みんな見たいわけ。その部長さんに若い衛生兵が「私たち何も邪魔しないから見学していいか」と言つので「お前いくつだ」と聞いたら、一九歳だと言つた。「ダメ、二〇歳以上」と部長が言つた。でも「僕は帰つたらすぐ結婚するから向学のために見せて下さい」と言つて頼んだそうです。それで見せてもらつて、みんな感激したそうです。助産のやり方がきれいで。アメリカは会陰をパチッと切つちゃうんですよ。ですけど、ていねいに、ていねいにまわりを拭いて、上手に出して、赤ちゃんが泣いた時には、みんな手を叩いていたんです。本当に私は誇りを感じました、日本人の器用なことに。アメリカの兵隊は不器用なんです、医者も。そつういふことで、私はしばらく中央材料室にいました。

ある日、院長のカーネル・ブリーズという方が「これから栄養失調の病棟を開きたいけれども、内科の経験のある人に来てほしい」と。するとみんなが「おシユンさん、行きなさい」と言つので私は行ったわけです。

そこで私は行く前に、「カーネル・ブリーズ、私はひとつご相談があるんです。お願ひがあります」「何だ」といつから、「メディカルライブラリーを使わせていただきたい」と、言つたら、とてもおかしな顔をしていた。何でこんなことをきくのかという顔をしていた。

私が調べものに入ったら、日本の軍医が入つて来て白い眼で見て、看護婦のくせにこんなところへ来て本を読んで、わかるのかという顔をしました。とても、いやな感じだった。もう二度と来るまいと思つていたんですけど、それから、はちゃんとした許可をもらいました。そして堂々と入つていつでもお勉強してわからないところは調べてゆきました。

栄養失調の研究病棟は八週間の研修期間なんです。私は、そこに日本の軍医、通訳が一人、私、私の他に三人程日赤の看護婦さんをいただいて組んで働いていたんです。

栄養失調の患者さんが、片方はまるで水ぶくれ、ちよつと押ししたらピッと出る様なぶくれ方の患者さんがズラッと二人。片方の端はまるで骨と皮、ちよつとかつを節みたいな感じ、そして眼だけがギョロギョロしている。そつういふ患者さんを比較研究でしようネ。でも比較研究って、私ははじめ、研究して研究して最後は殺すのかなとさえ思つたんですよ。

ですけど、治療と治療を並行してやっていたんです。患者の血液検査をよくしていました。不器用なアメリカの軍医が一週間に二回ずつ二〇ccの血液を取つてゆくんです、患者さんの。そしてついに、患者さんは検査だ検査だと言われて、僕たちは血を全部取られて死ぬんじゃないか、殺されるんじゃないか、と思つたと言つんです。それで私は、そんなことはない、もう一度つうつう状況の時に、あなたの様な状態にならないためには、どついたらいいかといふことを研究するのだから、あなたたちは立派な援助者なんだと言つたんです。「そつうかね」「そつうか」と言つて我慢していましたよネ。

ちょっと問題がおきそつな気配は感じたんです。ですから、みんな「危険はない」と説明して歩いたわけです。そついうふうにして八週間の仕事をしました。その間うれしかったことも悲しかったこともありました。

うれしかったことは、長いことお風呂にも入らない、皮膚をこすったこともないような人たちで、松の古い皮、あれを想像して下さい。皮膚がああゆつぷうになるんです。脂肪がでる、皮膚からの分泌物、外からの「ミネ、ホコリ、いろんなものがそこにたまって、だから本当に老松の皮膚みたいになってしまっています。ですから、お湯と石けんだけでは落ちないんです。さあそこで私は、油は、油をもって制するとういうことを思い出し先ず油を塗って落とし、それからお湯と石けんできれいにしたおぼえがあります。でも日赤の看護婦さんたちは全身清拭とういのを知らないと言っています。「ああそつぷすか、それじゃ一緒にしましょつ」と言つて二人ずつ組んで患者さんを一人ずつきれいにした。一日に三人ぐらいいしか出来ないです。時間がかかつて。その他は何もすることがないですから、採血だの、TPPRとうたり、それから氷枕をかえたり、それぐらいいしかない。あとは、医者がすることばかりですかい。

私は一番先にこの人たちの皮膚、顔、口、鼻、耳をきれいにあげたらどんなに気持ちがいいだろうなとういうことを考えて、このことを日赤の看護婦さんたちと一緒に始めました。

ある日、私たちが患者さんをきれいにしているところに、アテンションという大きな号令がかかるんです。ヒョッと見たら入り口にカーネル・ブリーズが、こんな太った極東方面の看護の一番上の方を連れていらつしゃったんです。カーネル・ブリーズが私のところに来て、この方はミス・ユーリンスと紹介して下さい、また、私のことを東京の聖路加から来た人だと紹介して下さい。ミス・ユーリンスは私に「あつ、ミス・ホワイト知っているかね」つて言つんです。「ハイ、私の先生でございました」と、そして何か言われた時にみんな軍人だから男なので、みんな「イエス・サー」つて言つんですよ。私は「イエス・マム」と言えはいいのに「イエス・サー」つて言つてしまった。

その人はミス・ホワイトとサンフランシスコでボーゼザミナーとして一緒に働いたことがある。一緒に働いたから知っているとういことだった。

ミス・ユーリンスはチラツときれいになった患者さんを見て「You're doing well. Very good.」上手やうにうなるとつうような言葉を残して去つてゆきました。そして残った私たち三人は「よかつたネまた一生懸命やりましょつネ」つて。そして患者もよろこび、日本の医者と通訳も見えて「すい分變つたネ、きれいになったネ」と言つたんです。そこへ又一人のアメリカの医師が来て、とってもきれいになってよかった。あなたたちよくやったとほめて下さつた。私は本当にその時に、きれいにしてあげたらどんなにか患者が気持ちがいいだろうな、とういことを一番先に感じとつたわけです。しかも、したことがとてもいい結果を生んだとういことになりまうたでもありません。

そつうつうつしているうちに私たちは昭和二十一年一月三日大寒の最中に今度は千田札一枚をもつて帰つてきたんです。無蓋の貨物列車に詰めこまれて、オシッコも何もできないわけです。動けないんです。佐世保から品川まで来たわけです。立てないし、「オシッコ」したいわや「や」とつうとみんながカバールしてくるわけです。飯「ウの中にして、そして知らん顔してありがたつて。飯」しか入れものがないんです。そして品川駅へ着いたんです。そして、ただの切符をせせごまつて、その切符を見せられれば、お風呂飯はそつういこの店で食べられるとういことだったんですよ。

それから、私と佐藤さんと鳥袋さん、三人が品川に降りたんです。そしたら見渡すかぎり野原でしょう。何もなし、そこに電車が一本だけ通っていたんです。ヒョッと見たら、三原橋行きというのが一台あったんです。これに乗ろうよ、乗ろうよ、というところで三人で乗りました。そしたら次から次へと大勢の人が乗ってきて荷物があっちゃんの方へ行ってしまうって取りにゆくこともできなかった。三原橋まで来て降りたけども、今度は和光は半分しかなかった。銀座は新橋まで見えたくらいです。それから「よしよし」と思っていますしたら車がきました。

私は今ですとG Iと一緒に働いていましたから、G Iを使うのが平気だったんです。それでバツと手をあげて大きな空のトラックを止めた。だれもいないと思っただけで、運転手が顔を出したので、「私は今フィリピンから帰って来たんだけど、こんなに焼けてしまっただけで方向がわからないから聖路加まで連れて行って下さい」と言った。そしたら、「このトラックはそっちの方へいかないからMPを止めろ」と言っ

MPってわかりますか。憲兵隊の二人が乗っている車、オートバイみたいなもの。あれが連れていってくれるから、あれを止めろと言った。そしたらそれがちよつと来たんです。そして手をあげて、そして私が一人で交渉しました。聖路加病院にいきたくないけど、こんなに焼けてわからないから連れて行ってほしい」といいたら「イエス・マム」って言って降りてきたんです。そして私たちを乗せて聖路加病院まで来ました。聖路加病院まで来たら、みんなG Iばかりです。といった病院はどうしたんだろうと思っただけ。接収されたということとは遠くから聞いてはいましたが。

寒い一月三日に帰ってきたのにG Iは白いシャツシー一枚です。おどろきました。それで、ひょつと見たら、ドアママンがいて、そのドアママンは昔、私の病室のおじさんだった。おじさん、おじさん、聖路加病院はどへへ行ったの「って言うたら」ジョンさんのお家に本部が出来た」と言いました。その間、その憲兵がずっと待っていたんです。それで憲兵に「

のもうひとつ裏だぞうです」って言うたら「オーライ」って言って、またそこまで連れていってくれた。そしてそのミセスセントジョンの家が本部だったから、そこで降ろしてもらって、私は降りてから、「とつてもすみませんけど、ありがたんだけど、何もお礼することが出来ないから、日曜日に行らっしゃったら教会でお会いしましょう」って言った。それから「OK」って言うってそのまま帰ってしまった。私は、お礼は「ううもありがたうございました」と言っただけでした。

本部に入ったら、大平事務長さんが出てきた。高い声を出して無事に帰ってきたと言ひ、ポールさん（ポールラッシュのこと）は、あなたが死んだと思っただけでも、マニラから通知があつて、聖路加の看護婦は死なないで生きていて大丈夫だと。もうじき帰ってくるだろうという通知は、マッカーサーのオフィスに勤めているポールに伝わっていたのです。大平さんがすぐにポールに電話をかけたので、ポールはジープに乗って会いにきてくれました。「おっ」って言うってその時に石けんとチリ紙とタオルを持ってきてくれた。私たち何もありません。石けんなんてなかったので、そういうものを持ってきてくれて、今にワック（女の軍隊で働く人）がきたら、和光がPXだから、女がいけば女のものを買えるから、また買ってあげると言って帰った。

その時ポールはGHQに会いに来て言ったんです。冗談じゃない。私はもらった軍靴をはいているんです。それはボートみたいな大きな靴で、二〜三枚靴下をはいて何とかおさまっていました。私がハダシで歩いていたか、将校がこれは自分のお金で買ったんだから、あなた、これはきなさいと。とてもじゃないけど、これからハダシではいろんな病気もあるからと。その時は日本の看護婦さんの看護をしたそのお礼として下さったんです。私はG Iの靴をはいていて、夏の洋服を着ているから行かないと言った。そしたら来てくれたんです。そんなことがありました。

病院は東京市から借りた整形病院にいました。私は、スーパーバイザーとして内科の病室に勤めたのです。内科の病室といっても二〇人くらいしか入っていない病室です。

それから南方ボケも治らない二年後に、戦後はじめての留学生として、金子さん、湯楨さん、私、中道さんの四人がアメリカへ渡りました。中道さんは亡くなったけれど、この四人が最初の女性のグループだったんです。その船の中も結局は私たちは負けた国ですから、はじめは三等室の底みたいなところに入れられたんですよネ。そしていばっていたのはGIの花嫁さんになった人です。降りるときに私たち若い番号を持っていたんです、降りるナンバーを。ところが、着いたとたんに戦争花嫁さんが先に降りて、私たちは二時間も三時間も待たされた。私の友達が待っていてくれていたんです。外で、それなのに三時間くらいも待たされて、私はぶんぶん怒って、怒りながら出ていったのをおぼえています。

無事に留学してウエーン大学へ行ったわけです、私は。他の人は別のところへ行った。ウエーン大学はわりに新しい大学で、プライベートの大学だったんです。私が行ってから五、六年してから州立に変わりました。あのへんではわりといい、名のある大学でした。一年ですから、ちょうど言葉が出来て、不自由でなくなるという時に、スーツケースをまとめて帰ってこなければならなかったんです。私は何を習ったかといったら、それこそハウツースタディです。勉強とはどういうことかということ。内科、外科をコンバインする、その頃学説にインテグレイション（インテグレイション）というのはふたつのものかたちを失わないでひとつのものにする（内科と外科を私は一緒にしたものを習ってきた

んです。勿論、臨床指導にも行きましたし、原理も習ったし、学習法も習ったし、そんなことで日本で出来るか出来なかわからないようなものもありましたですけども。帰ってきて、よし、日本で出来る限り出来るものは活用させてみようかと決心したんです。

昭和二十四年九月に戻ってきました。聖路加は接收されていましたが、東京模範看護学院に移っていました。私は後から行きましたから日赤に三年間だけいました。私は内科、外科を専攻していったのに、私は小児科病棟にやらされたんです。と申しますのは小児科のヘッドナースが、お嫁に行っていないから、お前教えるって言うんです。複雑な気持ちでした。でも私は卒業して、いろいろのところにローテーションして歩いたんです。小児科も婦人科も歩いた。そんなわけで経験していたということは、ひとつの強味ではありません。ただもうひとつは「ノー」と言うべきか「イエス」と言うべきか、すいぶん迷いました。はじめて就職して「ノー」と言っただけじゃないかと思った。そして私は「明日まで待って下さい」と言ったんです。

それから考えて、私は大人と子供とどこがちがうんだということさえ押さえなければ、私は教えられると思ったんです。第一、子供というのは大人を小さくしたものではないんです。子供は子供なりの人格をもち、そして各成長過程のプロセスに特徴があるでしょう。それに保護者がいるでしょう。そういうことを勉強すればと思ったのですが当時は教科書もなかったのです。

私が前に経験したこと、アメリカで習ったこと、それから聖路加の古い図書館小児科の看護の本があった。それをもっていましたから、それをひもといて一晩考えて次の日「いたしましよ」と言ったんです。でも言っただけでも

の、大変なことになったと思いました。

当時の小児病棟は子供と子供のベッドの間はくっついていて、オシメしている新生児、乳児、幼児もみんな同じところです。それで片方では咳をする、片方では下痢をする、そのようなところで私が一番先に気がついたのは、入院するとときに、お母さんは四組のオシメを持ってなければ入れなかったんです、その当時はオシメがないから、そのオシメをもってきた子供のものが必ずしもその子供に使うのではなく、他の子供にもつかって一緒になってしまっています。その人がいよいよ退院という時には、その子供のもってきた名前のおむつを現在使っている子供からはずして新聞紙に包んでもって帰る。こんなおそろしいことはないと思っただけです。もしこんなことで退院していった患者に、あるいは家の人に感染が起って迷惑がかかったらどういふことになるだろうと、私はすごく心配した。そして婦長さんと夕方おそくまでカンファレンスして、そして平均オムツを使っている人が何人、二四時間に何回換える、そつすると何枚必要だ。一人の人が何枚だから、何十人でどれぐらいか。それに使っている子供の必要な数の三倍を整えなければならぬ。それはアメリカで私がアドミニストレーションとして習ってきた。そしてそれを計算してみますと、何十反と莫大なラシがあるんですよ、莫大なお金になるんです。

ですけども、婦長さんと相談して、そのデータをもって院長室まで行ったわけです。私は管理権がないでしょう。だから婦長さんにみんな言わせたわけ。そしたらその時の東先生という院長が、手術場のなんとかという機械を買おうと思っただけで、これだけのデータを見せられたら、だまっではいられない。だから買いますよと、おっしゃって下さった。まあ私はガタツとなっちゃって、何だか気抜けしてしまいました。

それで帰ってきて、よかったネ。先生よかったよ、って涙流してよろこびました。それでスタッフの人にもそれをおんな聴かせて、そして一週間位したらたぐさんのせうしが来しました。来ましたけれど、オシメを作るのは我々なんです。それで夜な夜な、みんな作ったんです。何十反というものを、そして墨で一六、大きな字で書きました。だけど私は、「婦長さん、これは一度洗ってから子供に使わないとあぶないよ」と言いました。それは、アニディンという中毒のこと、私は文献を読んだことがあるんです。アニディン中毒といって、子供の呼吸器系中毒をおこして死んじゃうんです。だから院長にも話しました。みんなお正月に新しいものに取り替えてあげたいわけ。ひとつの子だけでも、やっぱりお正月というのはみんな気持ちよくさせてあげたいという気持ちがよくわかるんですけど、「洗わなきゃ使っちゃだめよ」って私が言ったの。それからみんな洗って外に干し、内に干し、みんなお正月の準備をしたわけです。

またこんなこともありました。一kgにも足りない赤ちゃん、赤ちゃんというか何というか、わからないぐらいですが小さなバスケットでインキュベーターみたいなのを作って湯タンポを入れて、ピローを入れて、ラバーのシートをして赤ちゃんをそこに寝かせ、氷のうをつるす※木製の氷のうつりで屋根を作って、中に寒暖計を入れて、中の温度を測りました。寒い北側の個室ですから、小さな電熱器でお湯をわかして蒸気を出し、温度と湿度と、テントの中の赤ん坊のいるところの温度もちゃんとして、手作りのインキュベーターを作って、世話をしたんです。死なないですんだんです。またある時小さな子供に元気を出すためにホルモン剤を使っただけです。ところが小さい赤ん坊ですから、針を刺したところ肉のしまりがいいわけ。注射針の穴が針をとってもじゅわじゅわ血が出ないです。じゅわじゅわ血液が出るわけ。私「あらっ、この小さい赤ん坊の全血液量ほどのくらいかと計算し、ここから三〜四ccは出るのではないかと」思って、それを確かめるために試験室へ行って濾過紙をもらって、そして三〜四ccぐらいの赤チンをいれて、シミを計ったんです。血液と普通の水とはちがいますけども、大体の目安が出来ますから。みると三〜四ccの出血になっているはずなんです。そ

れから先生のところへそれをもって行って「先生、これは血液ではありませんけども、大体どのくらい出血するか目安で作ったんですけど、あの赤ん坊からこれだけ出るんですよ」と言ったら「いや、たいへんだ」というので、先生はその注射をおやめになった、そういうことを若い学生だとか、卒業生が見ていて、看護を自分の生涯の仕事として決めた人もいるんですよ。

看護教育を全うするひとつの手段として実習というものがあるならば、臨床指導計画案というものはなくてはいけないというので、私はスタッフの人や婦長さんや、いろんな人に相談して作りました。それは皆さんが「いいからやりましょうよ」と言っただけ下されたのが、とても力になっています。そして臨床指導について「大体、計画はこういうふうなことをしたいと思います」ということを内科医長にもいったわけです。「ああ、いいですね、必要があればいつでも手伝いますよ」と言っただけです。それも大きな力になるんですよ。

それで、実験的に三年間しました。当時、看護協会、文部省、厚生省が再教育をもつぱらしていたんです。総婦長の再教育、それから教員、臨床指導の人たちの再教育を私は以来三年しましたから、非常にうけてもらいました。おそらく日本で臨床指導計画などを立てて、臨床指導が始まったというのは、そこからだっただけではないかと思います。今はカンファレンスなんて、普通に言っていますけどね。

病棟の三階で私が学生にカンファレンスしていたら、湯植さんが、「ああ、まあまあ、おシユンはまた学生を集めて話し合っているよ」と言っていて、白衣服でララッと通られたのをおぼえています。ですけど今は何でも普通になりまっています。

たネ。カンファレンスがなければおかししいし、患者の受持ちの選択もちゃんとしなくてはならないし、掲示もしなければならぬし、スケジュールもこしらえなくてはならないし、評価もしなければならぬし、今は当たり前のことになっています。

築地へ帰ってきて、内科、外科のクラスをもちながら、殆ど病室にいました。朝早くから来ていました。その時々、うご日野原先生が、若いレジデントを金魚のフンのように連れて歩いて患者さんのところへ行ったりは、それが済むとカンファレンスしていただきます。私もそこへ加えさせていただいて、カンファレンスが済んだ頃、手持ちのコーヒーとか紅茶をいれて皆さんと話しながら飲んだ楽しい時もあったわけです。その時はまだ橘先生が独身でした。もうひとり男の先生がいたんだけど、何という名前か忘れてしまった。その先生が最初にサラリーをもらったんですって。そして見たんですって。何だか見たことのあるような数字だと思ったら、「俺のサラリーは家の電話番号と一緒にだった」と可愛らしいじゃないか。

私たち卒業した時四五円もらったんですよ。河辺先生という医長さん、もう亡くなったけど二〇円、インターンの時に「いいな、みんなたくさんもらったよ。また銀座へ行くの」と途中で会うと声をかけられたものです。というのはやっぱり聖路加病院の看護婦さんはレディであってほしいという願望があったんですネ。品があって、いい女性、賢い女性であるということ。ミセス・セント・ジョンはそういうふうにして私たちを育てたわけです。きびしかったですけども、おかげさまで…。当時そういう教育だったんです。ですから外へ出て聖路加タイプというのがわかるそうです。他の人から見ると。私たちはどこががうのかわかりませんが「ああ、あの人聖路加よ、聖路加タイプじゃない」と

言っただそしです。

それから今度、新館に移って来ました。新館に移って間もなくでしたけども、三階のAの五十嵐先生、心臓の専門の方で、あの人から学校へ電話がかかってきたんです。「ちょっと、ちょっとおシユン先生。診てもらいたい患者がある。どんなケアしていいかわからない。看護婦さん僕もわからないから、ちょっと来て下さいよ」といって来て下さるんです。「ああ、そうですか」と言っ行って行ったの。そしたら全身水泡、膿疱、カサフタ、そんなのにおおわれていた。「あっ、これは天疱瘡でないか」と思った。

というの私は前に、旧館で経験したことがあったんです。私はそのことが頭にあったものだから「さあ、先生一度私の考えをまとめてみますから、先生も検討してみして下さい」といって、いろいろ書きました。

ひとつは、病人をきれいにしておくあげたい。というのには浸出物でくさい、そして、寝まきもガウンもシートもビチャビチャぬれている。そして何とか私はこの皮膚をきれいにしたいと思っただんです。きれいにしたいということ、浸出物を出るだけ少なくしたい、刺激しないで、きれいにしたいということ。

それからもうひとつは浸出物のロスを出来るだけ少なくしたい。感染をおこしたくない。水分が少なくならないよう口からも飲ませたい。もし、腎臓機能が落ちていなければ、蛋白質のものをたくさん食べさせたい。そういうことを簡条書にして。それから、きれいにする方法として西洋のタブバスを使わせてもらいたい。

それでB病棟の空いたタブバスを使わせてもらうことになったんです。それが、ひとつの条件。やり方としてオートミールを煮て、木綿の袋に入れて、それを湯船の中に入れるのです、患者さんをそっと湯船に入れます。皮膚がきれい

になると、赤むくれになるでしょう。またないものが取れ、新しい粘膜が出てくるから。その状態でまたないところを寝させたくないから消毒したものをしたい。そういうことをみんな書いて「先生、私はこういうふうに考えます、ちょうど大ヤケドのケアとよく似ていますね」と言ったら「そうだなあ」とおっしゃった。「先生、おぶろにいられていますね」と言ったら「やってみましょう」とおっしゃって下さった。だから力強いです。こうして十分準備をしてやりました。

「病人を湯船に入れるときは先生、頭もつけて下さいね」浮力を使って、頭さえもつければ浮きますから、それから2人のナースは両方に別れて、静かに静かにオートミールのぬるぬるしたものをつけながらカサフタを取った。それでシートのままストレッチャーの上ののせて、今度はベッドに新しいシートを敷いて、その上に消毒タオルを全部置きました。ということでは本当に先生はスムーズにできてびっくりしていました。「病人がきれいになってよかったです」と先生がおっしゃって下さった。

その時に私は、これが看護婦が自主的に出来るひとつのいいチャンスであったと思っっている。医師からのオーダーでなくて「こう考えます」と、それでオートミールをなぜ使うかというその理由はぬるぬるしているでしょう。表面張力を下げるから、きたいものを落とすんですよ。みなさん、昔は頭をフノリで洗ったおぼえはないですか。だって皆さん笑っけども、戦争中シャンブーないんですよ。だからフノリだとか卵の白味で洗ったものです。石けんなんてないもの。だからそういうことを考えると、ひとつ理由がそこにあるわけ。もうひとつは、オートミールは石けんよりも皮膚に刺激が少ないわけでしょう。刺激が少ないというのと、表面張力を下げる、やわらかくなって落ちるといって、それからそれはあんまりさだかではないんですけど、もしまちがったら「メンナサイ、その糊というものが糊気が皮膚に少

しでも残っていますと薄い膜を作るでしょう。そうすると浸出物を押さえられるでしょう。と私は考えたの。でもそれが理屈にあっているかどうか分かりませんよ。前のはちゃんと理屈にあったことですよ。それだけ私はハッキリわかりませんが、そういうことを先生にちゃんと説明したの。そしたら「ウン」と言っておさった。それから看護婦さんたちが一日おきにそういうことをして、だんだん良くなったという話なんです。

「どう見ますと、私の先輩の数よりも後輩の数の方が多いいみたいですネ。いや、名簿を見ましても、私の名前がほとんど前の頁に進んでゆきます。私は驚いているんですよ、本当に。毎年毎年、一枚か二枚前へ進んでゆくんなんです。

私は病室というものを大切にしていこうことを申し上げたい。なぜといいますと、ドイツ系のアメリカの教育心理学者が言いますのは、望ましい学習を100とするならば、聴くというだけで100の効果、それから見るといいうことが100%これで400%でしょう。それから、しゃべってみるというところが100%、今度は自分の手をくだしてやってみるというところが300%。そうするとみなさん計算してごらん下さい。好ましい学習が100とするならば、そういうものが加わった時には900%の学習効果があるでしょう。そんな効果のあるところがどこにあるんですか。病室じゃないんです。みんなそうしていますでしょう。聴いて、見て、しゃべって、しゃべってみて、それからやってみる。このものが全部出来るところは病室なんです。患者さんから学ぶことというのは、とっても大きいんです。私はぜひがん患者さんから習いました。おぼえました。それからお医者さんにもよく教えてくれました。先輩も教えてくれました。

私は本当に学生のおときは無知で、房事なんていうことを知らなかった。「先生、房事って何ですか」とってまぎらしたことがある。患者が言いつつから。新橋の医者さんが「房事していいですか」とって言った時「ハイ、ちよっとお待ち下さい。

まぎってきましてよう」って先生のとこへ行って「先生あの患者さん退院するんですけど、房事していいんですか」とって。「おシユンさん、あんたすわれよ」といって教えてくれた。そんなことさえも知らなかった。ですけどもずいぶん病気のことは教わりました。みなさんどうぞ病室を大切にしてください。病室にいる方はいいモデル、いい役割モデルを演じられる方になって下さい。病室へ行って学ぶ人たちは、その人たちに何でもまぎいて、まちがったことを自分一人ではないこと。というのは私たちは患者さんの命が、自分の手にあるんですよ。一度まちがえばコメンナサイですまないことだとたくさんあるんですよ。ですから注意をしながら親切に。

三つのこと。ヘッド、ハンド、ハートの三つのH。たいへんおそろまつの話でした。コメンナサイ。

(文責書記)

学園ニュース 第二三五号（一九九七年七月） 「フローレンス・ナイチンゲールの記事を授賞して」

本年二月の始めだったか、看護協会から、私が今年のナイチンゲール記事の授賞者の候補になった旨が伝えられた。「どうして私が？」と自分の耳を疑った。五月三日に、看護協会と大学からも、今年の記事の授賞者は私一人に決定と知らされる。今まではまさかと思っていたことが、もう人ごとではなくなった。

だれでも女性であれば、こんな時は何を着るべきか、帽子、手袋などなど気になるであろう。また私一人であれば、答礼の言葉もあるしつつ、気になることが日増しに増えてきた。日赤本社の看護課と大学の緊密な連絡により次々と情報

が入る。たとえば、洋服は紺の無地がよからう。帽子・手袋は無用。ホツとする。ところが六月三日の日曜日朝、教会へ行く時、義弟の運転する車のドアに右手の三本の指を挟み、目から星が飛んだくらい痛かった。大急ぎで薬局に飛び込み、必要物品をそろえてもらい、自分で救急処置をして教会へ行く。幸い傷は一カ所皮がむけただけで、指先も関節も動くのを確かめ、湿布材で巻いたが、次第に紫色に内出血と腫れが目立ってきた。こんなハプニングもあったが、当日にはすっかり元通りになった。

気になる答礼の件は、日赤本部から、参考になる見本を送って下さり、私の言葉を加えて送り戻し確認してもらう。最終的な文章が手元に届く。この上は、間違いないように読む練習をするのみであった。特に難しいのは、各宮妃殿下のお名前だった。六月一三日、日赤本部から七月三日の式次第と、式典のリハーサルプログラムが届いた。七月一日上京、一日はゆっくり休む。

七月二日一時半、日赤本社で式の予行演習、日赤本社看護課の皆様が総出で、当日の皇后様、各宮妃殿下の位置に着かれ、私の歩調のテンポ、答辞の読み方、お辞儀の仕方など、細かいところに気を配った指導を頂く。

三日当日は早々と洋服を着て、朝八時半から本舞台での最終リハーサルをして頂く。その後一〇時半まで休憩。緊張のためか、口内はカラカラに乾く。

一〇時四〇分、ステージに上がるように指示があり、皇后様、皇太子妃殿下、ならびに各宮妃殿下が御入場なさるまで、私一人が壇上にあっただが、その時間の長かったこと。ハンケチを握った手は、しっとり汗ばむ。やがてお迎えした皇后様は薄いクリーム色のスーツ、各宮妃殿下は、淡いブルー、グリーン、ピンクのスーツを召され、ライトを浴びて、大変美しかった。一一時、式次第に従って、君が代斉唱、日赤研修生によるキャンドルサービス、御歌「四方の国」が斉

唱され、いよいよ本章ならびに記章授与となる。章記は皇后様のお席まで頂きに行き、次に皇后様御自ら、私の席までお出ましになり、私の左胸に記章をつけて下さり、ついでお言葉を賜った次第である。

お言葉の中で、長年にわたり看護と看護教育に尽くされ、多くのよき働き人を世に送り、また比島においては捕虜の身でありながら多くの日本人の世話をされたり……といった意味のことを申された時、目頭が熱くなり、いつもの涙が出そうになったのを強く抑え耐えた。私の答辞も無事に終えることができた。生まれて始めて皇后様お手ずから記章を胸に頂き、またこの上もないお言葉を頂いた時に、「ああ、生きていてよかった」という、言葉で表現できない感激と感謝で一杯だった。皇后様は日本赤十字社の名誉総裁であられるが、四〇万余の日本の看護婦の名誉総裁でもある思いがした。これからも足腰の動く間は、少しでも誰かのお役に立ちたいと心に決めた。また、来賓の方々の祝辞にも胸に響くものがあり、心に残っている。この記章は、皆様方の代表として頂いた記章である。

式後のお茶会の際には、シャンペンで乾杯の後、皇后様は色々とお話しされ、比島の苦勞をねぎらわれたり、日本中に教え子がおられてよいですねなど、心温まるお話ができたのも、私の生涯に残る喜びである。

このたびは、日赤本社看護課の方々、そして、式典の際、付きっきりで私の世話を下さった岩井先生御夫妻、大学の皆様、特に事務職員の方に大変お世話になりましたことをこの紙面をお借りして心からお礼申し上げます。

(名誉教授)



葬送式次第

高橋シユンは二〇一三年七月一七日、享年九九歳で永眠した。
二〇一三年七月二〇日に行われた葬儀と、二〇一三年一〇月六日に聖路加看護大学において執り行われた「偲ぶ会」の、
各式次第を資料として掲載する。

葬送の式

会場	榛名聖公会
日時	七月二〇日(土) 一〇時
司式	秋葉晴彦司祭
説教	竹田眞主教
補式	鈴木育二執事
奏楽	秋葉緑

葬送の式聖歌

- 聖歌四七七番 (古今聖歌集) つとめいそしめ
- 聖歌四七九番 (古今聖歌集) ひとのめには

聖歌五〇〇番（古今聖歌集） み神のたましい
 礼拝後
 弔電披露
 お別れの言葉
 ご遺族あいさつ
 献花

看護に生きた高橋シユン先生の在りし日を偲び感謝する会

主催 聖路加看護大学・聖路加同窓会
 二〇一三年一〇月六日（日） 一三：三〇～一五：三〇

プログラム

逝去者記念の式

一三：三〇 於：聖路加国際病院 聖ルカ礼拝堂
 司式 司祭 関 正勝
 （聖路加国際病院チャプレン）
 補式・教話 司祭 ケレン・シーバー
 （聖路加看護大学チャプレン）
 奏楽 金澤 淳子（聖路加看護大学）

記念祈祷

前奏
 聖歌五〇〇番（古今聖歌集） み神のたましい



聖ルカ礼拝堂における記念祈祷

聖語（ヨハネ 一：二五―二六）
 交唱（詩編第三編）
 み言葉（イザヤ二五：八―九）（コリント二五：二〇―二六）（ヨハネ一四：一―六）
 教話
 祈り
 聖歌四五三番（古今聖歌集） いともかしこ
 後奏

礼拝後

主催者挨拶

日野原 重明（聖路加看護学園名誉理事長（代読））

井部 俊子（聖路加看護大学学長）

柳沢 啓一（ケアホーム新生の園園長）

川嶋 みどり（東京看護教育模範学院卒業生）

岩井 郁子（元聖路加看護大学教授）

高橋シユン先生を偲んで

ご遺族挨拶

一五：三〇 於：聖路加国際病院一階 レストラン エスベランス

高橋シユン先生との思い出

松本 満郎（聖ルカ礼拝堂信徒）

蝦名 美智子（一九六九卒）

長濱 晴子（一九六九卒）

松谷 美和子（聖路加同窓会会長）

終わりの挨拶



礼拝堂に飾られた記章、献花、遺影



経歴・業績

西暦	経歴・業績	関連する出来事
一九〇二年 一九一四年 一九二〇年	四月二十九日 北海道の牧師の家庭に生まれ日高地方平取で育つ	聖路加病院開設 第一次世界大戦勃発 聖路加国際病院付属高等看護婦学校開設
一九二七年 一九三三年 一九三五年 一九三九年 一九四二年	香蘭女学校卒業 聖路加女子専門学校入学 聖路加女子専門学校卒業 四月一日より聖路加国際病院に勤務 同病院内科病棟看護婦取締	第二次世界大戦勃発 聖路加国際病院から大東亜中央医道院に改名
一九四三年 一九四五年 一九四六年	六月一日 マニラ日本病院へ派遣される 副総経理兼看護婦取締 一月二日 内地帰還 聖路加国際病院勤務	第一次世界大戦終戦 GHQに病院・学校が接収 六月 東京看護教育模範学院で合同教育開始
一九四八年 一九四九年	七月二十六日 清里において聖路加スタッフによる農村巡回診療活動に従事（一九四七年八月まで） 九月一日 病室看護婦取締（一九四九年八月二日まで） 文部省及び厚生省主催の看護学校に於ける専任教員講習会の講師を委嘱される ロッキンフェラー財団奨学金にて米國ウェイン大学へ留学 一九四九年帰国 九月一日 聖路加女子専門学校教授に就任	聖路加短期大学開設
一九五二年 一九五四年 一九五七年 一九五九年 一九六〇年 一九六一年 一九六四年 一九六五年 一九七〇年 一九七一年 一九七五年 一九七七年 一九七八年 一九八〇年 一九八二年	一月一日 世界保健機構（WHO）西太平洋地区主催看護教育セミナーに日本代表として台湾に派遣される 三月二〇日 聖路加短期大学教授に就任 厚生省保健婦助産婦看護婦審議会審議委員を委嘱される 一九五八年 委員長となる 日本看護協会看護婦部教育委員となり一九六〇年 教育委員長を委嘱される 三月一日 国際看護婦協会主催看護教育セミナー日本代表（日本看護協会）として印度に派遣される 文部省看護学視学委員を委嘱される 一月二十五日 聖路加看護大学教授となる 大学設置審議会の専門委員を委嘱される 文部省大学設置審議会の専門委員を委嘱される（一九七二年まで） 国立公衆衛生院公衆看護専攻課程の講師を委嘱される 文部省看護学視学委員を委嘱される（一九八二年 三月三十一日まで） 四月一日 聖路加看護大学衛生看護学部長に就任（一九八二年 三月二日まで） 四月一日 聖路加看護大学図書館長兼任（一九八二年 三月三十一日まで） 五月二六日 学校法人聖路加看護学園理事に就任 三月二〇日 学校法人日本赤十字学園評議員に就任 四月一日 聖路加看護大学院看護学研究科長に就任 三月二日 聖路加看護大学退職 四月一日 聖路加看護大学名誉教授に就任 四月一日 聖路加看護大学非常勤講師を委嘱される（一九八三年三月二日まで） 五月一〇日 日本看護協会総会において看護教育一〇〇周年記念として厚生大臣より表彰される 五月五日 日本看護協会名誉会員に推薦される 五月一〇日 日本看護協会会長表彰を受ける 一月 叙勲 勲四等瑞宝章受章 七月三日 ナイチンゲール記念記章受章 七月一七日 襟名「新生の園」にて永眠 九九歳	聖路加看護大学開設 博士前期課程設置 博士後期課程設置



「手術場の麻酔の先生と私が組んで、学校のクリスマスのパーティーに二人の歌手として演技した時、メリーウィドーを歌いました」(シュンのアルバムより)



レクリエーションパーティーで学生の手相を見るシュン(1959年)
「だまってすわればびたりと当たる高橋易断」(同窓会会報より)



思い出の写真



清里における催しで シュンは煙草を愛した

おわりに

家族を代表して 高橋 農夫也

この度、ブックレットの発刊に当たり、多忙な中に執筆、編集、発刊、諸作業の労を執られた方々に、まずもって感謝と御礼を申し上げます。

姉シユンが聖路加女子専門学校に入学した年に、私は生まれましたから、家族としての一緒の生活はありませんでした。年に一度ぐらいの姉の帰省に会うだけでした。私が小学校二年生の時、提出した作文は、先生からお褒めをいただきましたが、原稿用紙五枚の長文を書いたことでのお褒めだったと思っています。内容は姉の帰省時のことを書いたものでしたが、普段会うことのない姉に対して、湧き出る嬉しさを、その長文を書くことができたと思っています。

国外派遣が決まり、帰省していた時、急に派遣先が変更になったと連絡がありました。冬物を用意していたのに、マニラと聞き、夏物に変えなければというハプニングがありました。別に慌てるようなことはなく、ただ、帰省期間を「〜二日早く東京に戻った」と記憶しています。そして、「何かあったら、ここに連絡を」と紙片を母に渡していました。子供心に、外国に行くということの重大さを知ったのです。でも捕虜になるなどは想像もしていませんでした。

マニラから帰国後、休暇で、家族の住んでいる寒村に帰省した時、下車するべき駅を間違え、小さな駅に降りた姉は、雪の降る中、途方に暮れていたなら、通りかかった農家の方が馬籠に載せてくださり、吹雪の田舎道をわざわざ家まで送って下さったそうです。

姉はよく言っていました。「どんな時でも道は開けるものだ、神様が一緒にいるんだもの」と。

一人東京に出てきても、教会との繋がりは途絶えることなく、いつも神様は共に居ると信じていたことは、幸いなことだったと思います。離れ離れに暮らしてきた私たち家族ですが、家族愛や兄弟愛に支えられる以上の、聖路加の建学精神「知と感性と愛」によって鍛えて頂いた故に、定年退職まで、無事職務を遂行できたものと思っています。

通い慣れていたであろう聖路加のチャペルでの、感激的な礼拝の中で、たくさんの方から僥はれたシユンは本当に幸せ者と思います。育て励ましてくださった関係の皆様には心から感謝申し上げ、聖路加がますます発展されることをご祈念し、感謝とお礼の言葉といたします。

本学ブックレット第二号は「高橋シユンその人生と看護」をとりあげました。

大学史編纂・資料室は、二〇一〇年一月、創立九〇周年を記念して、第一号「聖路加看護大学のあゆみ」を刊行しましたが、その後、続号の腹案を持ちながら、予算・専任担当者の欠員・本学に関する史資料の散逸や保管場所の不明等により第二号以降の発刊が大幅に遅れました。

昨年、新入生・新入教職員に配布していた第一号の残部が無くなったこと、初版刊行時に不明だった幾つかの事柄が明らかになり内容等の訂正が必要になったこと等の諸状況が発生し、初号に手を入れ改訂版を刊行しました。

今回のブックレット「高橋シユンその人生と看護」は、昨夏、逝去された高橋シユン先生の御遺族による寄付等によって実現しました。それは、高橋先生を偲ぶ会 準備委員会 が、故人の看護人生を形ある出版物として遺し、本学および本学に繋がる学生・教職員等の受け継ぐべき知的財産とすることが寄付の使用用途に最も叶うものだという判断によるものでした。

高橋先生は、先生の職業人生である四七年の全てを聖路加国際病院と聖路加看護大学の看護および看護教育に捧げました。先生は、聖路加女子専門学校が最も充実していた時代に外国人看護教師による厳しい教育を受け、その後、聖路

加国際病院およびマニラ・米国における異国での看護体験によって自らの実践力を磨き、続く三〇余年は教育に全精力を注がれました。

半世紀におよぶ先生の職業人生、また一世に近い人生全てを「それも戦前・戦中・戦後の波乱に満ちた人生」著すことは至難の業ですが、執筆にあたっては、先生の看護・信仰・人格・生活等に触れ、先生を深く理解し、よく識る方々に協力をお願いしました。

教え子である立山・川嶋・岩井氏らが記述されているように、教育場面での先生は厳格で、あの威風堂々とした姿から落とされる雷に学生等は縮み上がり涙することもありました。しかし、普段の先生は情愛深く、誰に対しても気さくで垣根をつくらない人でした。このことは近藤・杉谷氏の文章にもみてとれます。喜怒哀楽をストレートに表し、またブラックユーモアさえ解する愛すべき人でした。先生のそうした人間性豊かで許容度の広い性格は、両親・香蘭女学校・聖路加、そして外国で培われ醸成していった信仰が常に根底にあったからだと思われまふ。それ故、多くの教え子・同僚等は、この偉大な先生を高橋シユン先生と呼ばず、おシユンさん、おシユン先生、と最愛の呼称でもって慕い、尊敬したのです。

本ブックレットは、故人の生前を偲び死を悼む追悼集でもありますが、高橋シユン という人物に体现された本学のミッション、看護・看護教育の歴史、教師のあるべき姿等の記録にもなっています。

なおブックレットの体裁等については、大学と病院の法人一体化により変更すべき問題が残っていますが、今年度刊行の号までは第一号に倣う形にしておりまふ。

執筆者

岩井 郁子 川嶋みどり 近藤 潤子 杉谷 藤子
立山 恭子

企画・編集

聖路加国際大学大学史編纂・資料室委員会
ブックレットワーキンググループ

佐居 由美 直井 久枝 新沼 久美 渡部 尚子

(以上、五十音順)

聖路加ブックレット 2

高橋シュン その人生と看護

2014年7月17日 初版第1刷発行

編 集 聖路加国際大学大学史編纂・資料室

発 行 者 聖路加国際大学
〒104-0044 東京都中央区明石町10-1

印 刷 勝美印刷株式会社

